人生分疑義

96
479

96-479

帝國圖書館藏

八犬傳の疑義

明治
43. 6. 15
内交

もろもろの悲める人よ、いためる人よ、迷へる人よ、疑へる人よ、その堅き結び目は、こゝに解かれむ。

もろもろの惱める人よ、もだゆる人よ、怖るゝ人よ、嘆ける人よ、その得むと願へる所は、「求めよ、さらば與へられむ」。

この書を讀んで
わが師友故ヶー
ド博士に獻ず

吾れ惱めりといふ勿れ
吾れ痛めりといふ勿れ
君よ幸ある身ならずや

愛の御光とこしへに
君がほとりをめぐれるを
君よ幸ある身ならずや

人生の疑義目次

赤司繁太郎著

一　不完全なる人生……一
一　病める人に……五
一　苦痛の意義……六
一　事變災殃……八
一　試誘多き人生……九
一　イエスの試誘……二六
一　害惡の眞趣……四二
一　罪惡の價……七三
一　死の問題を考ふる人に……八一

目次

一 死の使命……一九八
一 死と復活……二二七
一 悲みの惠み……二四二
一 信仰の慰め……二五六
一 生命の主……二六二
一 新らしき天地……二九八

人生の疑義目次終

人生の疑義

赤司繁太郎著

(一) 不完全なる人生

逝く川の流は絶えずして然も元の水にあらず、澱に浮ぶ沫雨は且消え且結ぶて久しく止まることなし、世の中に在る人と、住家と亦斯くのごとし、玉敷の都の内に棟をならべ、甍を爭へる、たかき賤しき住居は世々を經て盡せぬものなれど、之を眞かと尋ぬれば、むかしありし家ほまれなり、或は去年破れて今年は作り、或は大家滅び小家と成る住む人も之に同じ所もかはらず人も多かれど、古

見し人は二三拾人が中に僅か一人二人なり、朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける、知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る、又知らず、假の宿、誰がためにか心をなやましなにによりてか目を喜こばしむる、其主人と住家と無常を爭ひ去るさま言はゞ、朝顏の露に異ならず、或は露落ちて花殘れり、のこるとは雖も朝日に枯れぬ、或は花萎みて、露猶消えず、きえずと雖も夕を待つことなし」

これは鴨長明が書いた方丈記の冒頭にある大序にして、浮世の變遷し行く有樣を誌さんとて筆を起せる句である、行文の妙を云へば流暢にして溫雅、情は溢れて言はんとする所を遺憾なく言ひ、其言盡きんとして餘韻裊々たるものありとでも評すべきであるが、その行文の上より人を動かすものがあると云ふより其思想の哀

愁なることは優にゾク〳〵として人を動かすものがある、全體佛教の思想は厭世的にして、この思想の所產たる文學上の作品をみる時は人生の墓なく憐れな狀態を咏じたものが非常に多いのである、「父子相迎」と申す書などを見ると人生の無常なる有樣が、丸で眼の前に看てゞも居るやうに書き現はされてをる、誰かこれを見て人生の憐れなるものなることを確かめざるものはあるまい。

人世は果して此等の文學に現はされてをるやうなものであらうか。

世を眺めて、各箇人の心を觀察する時に、著るしく感せらるゝことは、世には殆んど一人も自ら滿足の狀態に居るものがないと云ふことである、いや、全く眞正の滿足を得て居るものがないのではない、巢鴨の病院に參りて、慢狂者に會し彼等の心理狀態を研究する

ならば彼等の中には自ら思ふやうな滿足なる位置に達して居ることを信じて、圓滿具足の滿足心を得て居るものがあるかも知れない、予が知れる一人のものがある、其人は實に不思議な人で自ら預言者である、覺者である、われに些の不滿あるなしと信じて、街路を通行してをる時も、自ら預言者なりと誌したものを身にぶら下げて、眞にそれは〳〵羨やましき程滿足して居られるのがある、狂院以外では唯この一人である、其外に嘗つて、眞正に自己に滿足してをるものを見たことがないのである。

何れの方面を見ても一人として滿足してをる人を見出すことは出來ないのである、或る經驗ある學者は、「人は五十に達して厭世家とならざるもの稀なり」と申したが、實にこの言は當らずと雖も遠からずとも評すべき眞理を云ひ現はした言葉である。

人は決して現在の我に滿足することの出來ざるものである、單に一箇人としても、又單獨ならざる社會の人としても自己の現在を呪ふものである、或人は現在の我が境遇に滿足することが出來ない所からして、過去に其想を走せ、無邪氣なりし幼時を追想する結果、何卒かの世の憂を知らざる幼者に再び立返ることが出來ないかと問へてをるものもある、これは單に一箇人のことのみでない、一國家も一社會も亦斯る心的狀態に居ることが屢々である、支那人の裡に流布する思想は永い〳〵間の歴史的事實となつて其文學上の製作品の上にも現はれてをるが、堯舜の昔を慕ふの情である、「世は澆季となれり」とは即ちこの黄金時代たる堯舜の御世より遠ざかり行くと云ふことを意味するのである。神話などによくある黄金時代と云ふが如き考も、其神話時代の人々が其現在の狀態

に滿足することの出來ざる自覺心(自覺心と申しても明らかに彼等に自意識せられてをつたか否かは實に疑問としても、斯る意識が心の奥底深くあつて只何とはなしに朦朧ながらに斯る感じで其現在を悲觀してをつたやうに考ふるのは余り正鵠をはづれた觀察ではなからう)より、こゝに斯る神話を生ずるに至つたのであらう。希臘の一傳說によれば、最初に黃金時代がありて其時は凡ての事一として愉快ならざるなく、其何事も容易く快よき事情の下に生存せるものは最も愉快なく、總ての事一として光榮あらざるに、最も滿足したる狀態にて住んでゐた、所が時代は去つて、茲處に銀の時代と代つた、然しこの時も尙ほ苦痛に比ぶれば愉快の方が多かつた、生活も容易にして樂しかつたのである、然れども、こゝに其時代に次ぎて現はれたる時代は鐵の時代である、凡ゆる事は皆

苦難と悲哀の裡になされねばならぬ、これが即ち人の時代であるとやうに說かれてある、これも確かにこの人の時代は不完全にして眞正の滿足がないと云ふ事を表明してをる人の叫聲である、之に類してをる思想は猶太にも見出される、即ち舊約全書の第一卷に誌してある、エデンの樂園の物語と人類墮落の譚とは即ち之れである、人生の生活中に苦痛と悲哀と憂愁と死との陸續として起つてをることは凡ゆる人の心に一の大なる疑問を惹起させずしては止まないのである、この問題解釋の一として顯はれてきたのが即ち斯る人類墮落物語と云ふやうな譚の生じた所以で、猶太國民は確かに、其一解釋を創世記中に提供したのである、幼稚な想想ながらも兎に角に思を深く人生の疑義に觸れて、現在の狀態を呪へるものなることは疑ふべからざることである、現在を呪ふと云

へば今日の社會主義なども其一、否、否其隨一であると申さねばならぬ、モーアが書いたユトピアにした處で、其思想の根底に横つてをる所は即ち現在の世の狀態が益々非にして人心の要求する所に愈々背戻することを慨した結果である、トルストイが現代の文明を呪咀するのは亦同じ所から出てきてをる、世は文明の進歩に醉ふてをる、物質的の利便と發達とは目を眩ずる許りの勢で人生の生活を滑らかならしめんと企てられてをる、發明家は續出して自ら其鋭敏なる觀察と愼密精緻の考察とによりて新しきもの新しきもの、利便なもの利便なもの、人の苦勞と勤勞とを省略するに足るべき利器を發明してをる、人生生活の凡ゆる方面に渡りて、いよ〳〵精巧なる、益々容易なる機械は現はれきたりて、人の間より、汚れたるもの、苦しきもの、疲るべきこと、嫌ふべき厭ふべきもの、凡

ゆる惡しきものを除去せんとしてをるのである、然らば文明の進歩は、當然人生を愉快ならしめ、容易ならしめ、豐富ならしめ、滿足ならしめねばならぬのである、しかし其實際に就いて考ふれば、文明の進歩と人生の慰安とは反比例をなして進んで居るのではなからうか、人生全體を便利に導びく爲めに發明せられたもので單に少數なる富者のみに利便を與えて其人間の最大多數を却つて塗炭の困苦に陷いれしめざるものは少ないと申しても敢て過言ではあるまい、富は人か其生活を安易する方便として最も大切なる一の資である、この富の增加は實に莫大なものである、十九世紀の前半富は十九世紀間即ち一千八百年間にあつた富だけ增加してをる、而して其後半五十年に增せる富の高は少なくともその二倍强と云はれてをる、この增加の原因は確かに發明や文明の進渉に負

ふ所である、日本に於ける富の增加に付いて考へてみたまへ、日清戰爭の時は二億の公債を負ふたので國民は蒼白になつた、然るに日露戰爭の時は僅かに前とは十年を隔てた許りであるが十億以上の公債を負ふても差程驚ろかなかつたことを思ひ合すれば、富の增加の割合が如何程までに大きく盛んなものであるかは察せらるゝであらう、米國の富の增加に關して云はれてをる所を見ると一千八百六十年に於ける全財產高は一百六十億弗を超ゆること余り多からざりしものが一千八百七十年には二百四十億弗となつてをる、而して一千八百八十年には四百三十六億四千二百萬弗と增加して、この時以後米國は其富に於て世界の各國に冠たるものとなつた、英國は世界最大の强富國であつた、一千八百六十年に二百六十億弗で、一千八百七十年に三百四十億弗、其一千八百八

十年には四百三十億であつたのと比すれば確かに米國の富の增加は驚くべきものである、而して其發展の方面は殆んど總に行渡つてをる、鐵道、製造場、商館、機械館、倉庫、造船所、卸賣及び小賣商、其他大ひなる財政の機關、假令ば銀行、保險會社、貯蓄に對する諸方面の事業、市街を飾る大厦高樓、宮殿、道具、裝飾、藝術品、貴重品、數え來れば數限りもない程の凡ての價あるもの、何一つとして富の發展を表せざるものはないのである、然し斯く增加し來れる富は果して豫想さるゝ如くに人生を樂しく、富して居るであらうか、其分配は如何になされてをるのであるか、「進歩と貧困」とはヘンリー、ヂョルヂが叫びし所である、富は增加するのであるが、只其富は少數の人の手中に收められて最大多數の人々は益々貧しくなり行くのである、便利なもの、貴きもの、善美なるものは皆富者なる少數の人々の

みに用ひられるのみとなるのである、これは富の分配に關する上に非常な不公平があるのである叫ぶものは社會主義の人々である、其論ずる所の是非は扨置いて、彼等が現代の文明を呪ふてをることは明らかなことである、トルストイは社會主義者を痛罵する人である、然し其論點はこの以上の點に於て一致してをる所が多い「惡魔の仕事は國家と教會と文明とを機械として人を墮落せしむることである」と、斯くて彼は人生の現在を呪ひに呪ふてをるのである、よし、社會主義やトルストイとまでは行かずとも各人皆それ〴〵に現代に不平がある否他に對し社會に對してはないものも少なくとも自己の境遇に對して多少の不平のないものはないのである。

如何なる種類の人でも、如何なる事情に在るものでも、皆吃やいて

をることは境遇の不完全なことであらう、電車などに乘つて側で、小聲ながらに人の談話してをる所の斷片的な洩聲で、聽くとはなしに聽かさるゝことは、其人の身上に現はれ居る心配談である、この時に何時も考ふることは、又この人の境遇も不如意であるか、不如意の人でない人は誰であらうか、その人を見出すには仲々心細いやうな氣がすることであるなど思ふ、同情の念である、若い時よりの知人で、今は有名な銀行家の婦人となれる人があるが、この頃の談話に「金錢の不足なと嘯くことが先づ少なくなると家内に病人が出て心配が增してくる樣である」と、一難去れば又一難が新たに來るものである、中には「泣面に蜂」の俚諺をそのまゝに經驗の上に味つてをる人が少なくない、いやこの方が實際に世人の多く經驗する所である、前門の虎を防いで後門に狼ならば未だしも、前門

にも後門にも獅子や虎や狼が吼え哮つてをる、人世は涙の谷と悲觀せざるを得ない、青年の時には前途を望んで希望洋々たりとでも評すべきかも知れぬ、而かも冷眼其希望に滿てる青年の實狀を熟視すれば、彼も亦其現在に滿足してをるものでないことは明らかである、而してこの青年程また現代に對して深刻な呪咀を實現するものは少ない、維新時代の青年は實にこの不平の實行者である、されど兎に角青年者には不平もあらうが又希望より湧出し來る喜も有してをる、所が學窓の下より浮世に跳り込むが早いか、外界の光榮と善美とは只彼等の浮きたる心の夢幻であつたことを味ふ事情が陸續として起つてくる、親子の間にも、兄弟姉妹の間にも、親族間にも相互の關係の上に厭ふべき事件に惱まされる、一番によきものは友情である、しかもこの友情の精純なものは何時、如

何なる境地に出來るものやら、仲々に覊束ない、稚な友と云ふ、永久に變らざるの友情をと誓ふ、しかし互に誓へる友情も境遇が異なり、住む所が違へば「去るものは日に疎し」との歎聲と共に友情の誓も反古とならざるものは少ない、回顧すれば予が幼年の頃共に小學校に學びし人で今日まで交を同ふしてをる人は一人もない、中學に在りし日の同窓生にて九州久留米を出てて上京せしものが少なくとも二十名位は居たのである、しかし今やかの儘眠術の大家として世に名高き山口三之助博士の外は一人も知れる人がない、山口君とても今や遠く米國の天地に遊學して、其消息は杳として分らない、思へばこれも無理のないことである、予が生れた所は久留米を隔つる二里弱の寒村で其最大部分は農家で、學問などゝは考へもしてゐなかつた、其時小學校を出てゝ中學校に入りしも

のが既に三人とはなかつた、これが今より二十四五年前の土地の狀態であつた、小學校にて親しかりし友は今何の處にかある、尤で隔世の感がある、其中學校に在りし友と雖も東京に遊學せしもの二十余名中、其學ぶ所が異つてをる、學ぶ所が異れば自から趣味も異るであらう、仕事も異なる、中途にて四方に散亂する昔時の友今は全く赤の他人である、と云つたやうに誰でも其幼少の時からの經歷を追想するものは言ふに言はれぬ寂寞の情に、何んしも知れぬ一種異樣の感を含む熱涙を眼に浮ぶるであらう。

青年の温き血は齡と共に冷かになつてくる、浮世の荒浪に漂はされては希望も其大さを磨滅らされる、痩せ衰へたる身體には冷き冬の夜の寒さも犇々して應へるやうに、無情なる人生の辛酸も尙更に酷く心に響くものである、五十にして厭世ならざるものなし

と誠に味ひある言ならずや。

よし青年の希望する所が思ふ樣に達せられたりとするも、既に達したる時に、前に希望せし時の魔力と喜悅も何處にか消え去つて跡かたもなくなるであらう、人の心を迷はせ、魔するかと思ふ程に人心を引着する希望も、實現せる曙には、既に希望でない、望を見は亦望なし既に見るところの者は何で尙ほこれを望まんや」とは大聖ボーロの喝破した眞理である、志望も、大志も、夢想も、よし青年の未熟なる心より望まれしとて仲々達せらるゝものでない、又達せられたりとて其希望に附隨せる奪心的な所を失ひて只普通のものとなるのである、しかし、此等は眞に希望たるの價値なきものである、眞の希望は決して實現さるゝやうな淺薄のものでないいやこの希望の最も高尙にして人生の奥義と關係を有するものは即

ち理想である、この理想に至つては何時達せらるべきものであらうか、達せらるべき希望を有して、永久不斷の勇猛心を勵まし〳〵永久不斷に憧憬ながら、久遠の裡には初めて其境に至るであらう。希望も亦この理想に似た所がある、人の希望は恰かも山中の旅行に偏しきものがある、目前の雲表に聳ふる山の頂に向つて進む時、辛苦艱難して、岩角に躓き、樹根に倒れ、漸くにして一山の頂に達するかと思へば、わが目蒐る高山は尙ほ前方高く雲霧の中に朦朧として聳え立つてをる、行けば行く程其さきにと現はるのである、人の希望も達したと思ふ時は又其新しき希望が尙ほ其前に聳えて、吾人を迷はし誘ふて居るのである、いつも〳〵も光榮と驚歎とは前面にあるのである、未だ見ざるものを望まば忍てこれを待べし」とポーロは云つてをるが、眞正の希望と理想とを有するものはい

つも永久に忍びて待ちながらに前進するのである。然らば吾人希望を有するものには何時と申して其現在に滿足すべき時があらう筈のないことは明らかではないか。

今少しくこの希望の詳細に關して論歩をすゝめてみやう。

人生を樂しくする一機會が確かに富に在ることは前にも論じて置いた、この富は萬民の得んと望んである所である、「地獄の下も金次第」とさへ言はれてをる、富の勢力の强きことは今更喋々の辨を要せざることである、而して人がこの富を滿き求めて居る有樣を云へば、初めは千圓もあれば安心するやうなことを云つてゐる、最早百圓を得れば、千圓は既に一萬圓に標準が進んでくる、一萬圓を得れば百萬圓を追ひ百萬圓を得れば千萬圓を望む、朧を得たものが蜀をも得んと望むのは人心普通の要求である、米國の或商人で

其富鉅萬を有するものに成人が、汝は幾何の富が欲しいのかと尋ねた時、彼は「もう少し許り」と答へたと云ふことである、この「もう少し許り」と云ふこの「もう少し」は何時まで經つても止まる時がない、「もう少し〳〵」で、滿足する時がない、實に「もう少し」とは妙句でないか。

如何に有余る程に金錢があり、物質上の利便があつた所が、人は靈性を有するものなる以上到底滿足の出來やう筈がない、人生は物の多きを以て成立するものでない、人格を養ふだけの材料として物質は價値があるかも知れぬ、否低き精神生活をやつてをるものには物質が幾分かは滿足の出來る原因となるかも知れぬ、しかし物質で靈的要求を滿すことが出來るものと思ふものがあつたら、それこそ非常な誤謬である、精神的生活の資料として物質を用ひ、

益々精神的生命の意義を物質に假託することが出來るやうになつたならば、始めて物質に價値が見出されてくるのである。然らば精神的生活の方面に眼を轉じて觀察を試みてみましやう。

人の高貴なると下劣なるとは畢竟するに其人の有する理想の高下によると申しても差程誤ではなからう、人の行爲は實際その人の理想に從つて漸々變形するものである、而して其理想が低ければ之によつて形づくられるべき人物も少さく、其理想が高ければ之によつて形づくらるゝ人物も大きくなる、時には理想の高くして行爲の之に伴なはず、未だ立派な人物であると云へない人もないものではないが、それは未成品で、今や其中途にあるもので、其望む所に達せられ得る境にあるからである、若し理想が明らかとなり、理想の中に自己が飲み込まれるやうになれば、如何しても理想

によつて形づくられる樣にならなければ止まないのである、それで理想は成るべく、明らかに、高く貴くなければならぬことが明らかになる、この理想は初から終まで始終一の形を有して少しも變ずることがないものであるかと申せば、決して〳〵左樣ではない、理想は永久不斷に漸次わが位置が進めば進む程隨つて先進するものである、一の理想せし所に達すればその先に又前よりも高く貴き價ある理想が現はれ來るものである、全體偉人と呼ばるゝ人は如何なる人であるかと申せば偉人とは高き理想を掲げ、その理想に慕進せんとて大奮闘をなすものである、偉人には普通の人によりも善惡の區別が明らかである、善惡の區別が明晰となる一大原因は確かに理想の高きためである、善惡の標準たる規矩標準が明晰で高貴なれば、それだけ其標準に合致せざるものが多くなつて〳〵

るわけである、言葉をかへて云へば善と云ふ中にも不醇粹なる分子を含むことの多きものなるが、この不醇粹な部分は益々排除されて最も正醇なる部分だけが殘るやうになるのである、茲に於てか偉人には普通の人よりも奮闘すべき部分が多くなつてくる、而してこの部分の奮闘によつて益々勝てば勝つ程、苦悶すればする程歩をすゝめて偉大なるものと昇り行く、隨つて前の理想が益々高くなり行くのである、偉人には誘惑がないやうに思ふ人があるやうであるが、之は全く誤りで、偉人は普通人よりも却つて誘惑が多い、無論その誘惑の性質も普通人のより一層高く猛烈である、耶蘇の試誘譚が新約全書中に誌してあるが實に斯くも烈しく斯も大きくあるかと驚かすものがあるのである、この試誘の一階段が人物の一階で、一の試誘に打勝つて始めて光榮のメタルが得らる

、しかしこのメタルは最後の勝利を示すものでない、キリスト教の大宣傳者にポーロと云ふ大人格を具へてゐた人がある、彼が其心中の苦悶を白狀してをる句がある、「わが願ふ所の善はわれ之を行ふ能はず、却つてわが願はざる所の惡を之れ行へり、嗚呼われ苦悶るものなるかな、この死の體よりわれを救はんものは誰ぞや」と絶叫してをるのである、ポーロの如き偉人にしてこの句があるのは誠に偉人なる人格にも幾多の煩悶が附隨してをることを表するものと云はねばならぬ、ポーロ然り、耶蘇も亦同じく其苦難があつたのである、耶蘇は其理想に於て見るに實に永久不斷に向上して尙ほ常に達することの出來ない程の「神の完全」を其理想となしたまふたのである、この神の完全なる理想に人をも導びきたまはんとて、身を犧牲となしたまふた程である、この高且大なる理想を

愉悅し、永久不斷の向上心を以て其理想に驀進したまふ所に耶蘇の偉大なる人格は存するのである、而して耶蘇も亦自らこの理想に達せずして常に進みたまふたことを見ても、いかに理想が容易に得らるゝものでないかゞ解せらるゝではないか。こゝにも亦人生の現在がいかに不完全であるか、人生の實生活に如何に不滿足なる點があるかを悟ることが出來るであらうと思はるゝのである。

眞理と云ふ問題の方面を少しく觀察してみやう、科學の進歩は最近半世記の間に著るしきものがある、この分で進めば必ずや宇宙萬有の秘密なるものは一として闡明せられざるものがない所まで行くであらうかと思はしむるであらう、いや現に科學者自身に斯く考へてをる人も少なくないのである、そうすれば眞理研究の

方面にこそ唯一の滿足が得らるゝのではなからうかと愁眉を開かしむるものがあるしかし之も亦吾人の觀察が未だ不足なことから斯る謬想を起すのであるが故に、茲處にも亦吾人は一層明らかに世人の誤謬を正さねばならぬのである、科學の進歩、人智の開發によりて數十年間人の心を惱ましゝ來れる問題で明らかなる解決を得たものは甚だ數多きことであらう、プラグマチズム論者の唱ふる如く眞理は即ち觀念が事實と適合することを云ふと申すことを先づ眞理として、この見出されたる眞理によりて多くの秘密が闡明さるゝやうになつたことは疑はれない、實に之は科學者の功績として彼等に敬意を拂はなければならぬのである、然し、この大なる努力と大なる發見とを以て今や宇宙の秘密が如何許り明らかになれるかと申せば實に秘密の最小部分に過ぎないので

ある、否秘密は一方闡明さるゝものあるだけ多くなつてくるのである、或人の考では科學が進み進んだ曉には宇宙の秘密が全然なくなるやうに思ふてをるのであるが、これは全く夢想である、誤謬の考である、これが自らを僞く科學者の高慢を來す所以で、大なる科學者、眞正の眞面目なる研究者はいつも慊遜なることは人智の限あることゝ宇宙のいよ〳〵深奥なることゝ神の攝理の幽遠なることゝである、予は思ふ、人智の開發は永久に大きくなる而して宇宙の秘を開きつゝ進むで、行くであらうが、宇宙の秘密は又いよ〳〵其範圍を擴大し永久に不明の點もすゝむべしと、「宇宙の謎」や「世界の奇觀」などで宇宙の秘密が全然解決されたとはよもヘッケル博士も思うまい、このヘッケルの受賣位で基督教徒を思想上に迫害し得たと思つても仲々そう容易なことでない、精細はいよ

〳〵精細に檢査はいよ〳〵秘密にすゝみたうと申しても、いよ〳〵よすゝめば進む程凡ての問題が一層錯雜交叉して、實に人智はいとも小さく淺薄なものであることを歎せざるものはないであらう。例て申せば山に登るやうなもので、廿六年の夏のことである、友人五名と富士登山を試みた、午後二三時の頃須走口を出てゝ日沒後は木立の茂れる間を炬火を點じて進みし時の爽快さ今にも其光景が偲ばれるのである、中食と云ふ所で一泊し、翌朝三時頃殘月の涼しき影を蹈みながら、やはり木立の間を樹の根や岩角などに躓くやうなめに合つてすゝむ、其四邊の光景は朦朧たるものがある、月の光で物を見る程明らかなやうに思へて不明のものはない、眼界は廣いやうで狹い、太陽の東天に上らんとする前に五光をさす、鬱蒼たる木立は離れて既に身は四合目の岩窟の前に屹立して

をる、上れば上る程眺望の範圍が擴がる、而かも其擴がるは同時に自身の小さきことゝ、眼目の達せざる範圍が擴張するのを感ずることである、頂上に立てる時の眼界はいよ〳〵廣い、相房の海岸線は遠く眼に曲折してをる、地平線の處には何とも云へぬ淡靄がほんのりと畫を彩つてをる、こゝに於てか知る、高く昇れば上る程明瞭なる範圍の擴がることは論なしであるが、又之と同時に眼界は擴大し眼光の達せざる範圍はいよ〳〵廣く吾人を圍繞してをることを悟るのは實に容易なことである、否々智識が進めば進む程いよ〳〵深く精密に其奥へ〳〵と極微な點を知りたいと務むべきである、草の葉一本を取つて、其何から何まで總ての秘密を解明し得る學者があるか、或點は只單に假定として止まつてをるのではなからうか、これは單に物質上のものをのみ云ふのであるが、若

し之が直接に人生問題に關するならば、この物質問題よりも尙ほ其眞理を闡明ならしむることが困難なるを悟るであらう。

眞理研究者の態度は實に嬰兒の如く無邪氣であり又謙遜とならねばならぬことは以上の理によるものであるが、こゝに他一面の宗敎家が唱ふる所は實に誤謬も最も甚だしきものがある、それは、「人智の界限は狹く淺きものである、この淺薄なる人智でキリストが神でないとか、聖書が無誤謬でないとか、其他奇蹟がないとか何とか云ふことが出來るものか、されば吾人は宜しく、凡ての在來の神學說を受納すべしと」云ふのである、これは全然論理の方向を誤つたものと云はねばならぬ、科學の進步、人智の開發に連れて宇宙の秘密の幾分は明らかにされることは確かである、知れる範圍の擴張されることは明らかである、然しこの以外に不明の範圍がな

いかと云へば、それは大いにありと云ふことは證認する、然し既に知れたる範圍をも不明の混沌中に投じ去るのは愚に非ずんば狂である、この明らかにされたる智識の範圍內に來るべき問題ならば、無論其知られたる智識によりて、これは誤謬であるとか眞理であるとか明らかに判決のつくべきことである、而して又知られざる範圍の問題は只無暗に非難すること拒否することは間違であると同時に之を其儘に眞理と信ぜねばならぬことはない、これは知られたる眞理を標準として推論することは決して潛越でない只完全な眞理の斷定がそれによつて得られないと云ふまでゞある、之を其儘に眞理とせよとは餘りに自己の立場、歷史上の當然すゝみ來れる立脚點を蔑視することである、斯ることを指して迷信謬想と云ふのである、こゝが今日宗敎家とそれに疑惑さるゝ人々

の陥る缺點である。

人生問題に關して論究する人々は實生活の上よりするものもあれば、眞理研究の方面より哲學的に又は科學的に之を論ずるものもある又文學の方面よりして之を解せんと試みるものも多いやうである、一昨年より昨年初にかけて喧囂たりし議論は重に文學の方面よりみた人生觀である、自然主義者は明らかに斯る議論をなせるものの代表者とみて差支がないのである、

人生の現實なるものは未だ研究し盡されなかつた、理學者ニュートンが云つたやうに「吾れは海邊に遊べる小兒である、僅かに二三の變つた石を拾つたにすぎぬが眼前には底知れざる大海洋が擴がつてをる」と、人生も亦斯る底ひも知らぬ大海洋である、吾人の研究せる所は只單に其二三の小石を拾ひ上げたにすぎぬのである、

然るにこの二三の小石を以て他を推したり、恰かも海洋の深底にある砂子までも數え上げたやうな喜劇顔して、人生は缺陷が多いとか、貧弱だとか、醜だとか、不完全だとか、何とか、かとか云ふものは未だ話し相手にもなるものでない、この人生の現實を飽までも研究する歩武を進むるものが、强者である、その人生の現實を研究することもせずして安りに理想を說くのは弱者である、恐らく其研究の困苦に疲れたからであらう、而してこの無解決のまゝなる人生をこのまゝに語るものこそ眞正の文藝上の强者と云ふものである、如何なる理想も決して人生を解決し得るものはない、只一時的のものである、この刹那的、一時的理想即ち、計畫を最後の隱家として現實を見ざらんと欲するのは弱者怯者のなすことである、この無解決の人生を游き廻り、手足に觸れた現實を正々堂々と語る

ことは最も正當で又愉快なことである」と說くものがある。人生は果して無解決なものであらうか、又未來にも無解決のまゝであらねばならぬものであらうか、理想を畫いて人生を解釋したいと望むことは無道理なる欲望であらうか又之が解釋を試みんとすることが誤謬であるか、人智の開發によりて何もかも知つた風に取扱ふことが眞理に遠ざかつてをるやうに、解決されたものまでも解決されざるものの中に投して之を混沌たらしむることも亦眞理に遠ざかつてをるのではなからうか、一の大理想を既に見出されたる眞理の上に築き上げて萬心の全力を籠めて未た知られざる底ひも知れざる暗黑な人生の中に潛みて其中より理想を握得せんとすることは果して怯懦と呼ばれねばならぬのであるか、解決された所によりて解決されざる所に進むより外に途ありとす

るのは、未た吾人の心理狀態と人生の實生活とを知つてをるものと見ることは出來ない、人生の不完全と云ふのは現在のわが立てるその人生を云ふので、吾人が理想の人生を云ふのではない、而して吾人の理想は永久に現實さるべきものでない、其理想には益々近づくであらうが、永久に成長し、發達し、大きくなるもので、こゝに不朽の生命を認知すべき一の機會が存じてをる、いつまでも〳〵と向上し行く吾人の生命、人生は一方久遠の生命を預定せずして完うせらるゝものでない、眞理は一の實在の其眞相に適合したる認識と云ふが人生の研究に於て其眞相に適合した認識をそも何とすべきか、こゝにレッシングが云つた言葉のいよ〳〵妙趣を味ふことが出來る、若し神が右の手に眞理を有したまひ、又左の手に眞理を求むるの勇猛心、これには非常の

は眞理そのものではない、眞理を求むるの勇猛心、これには非常の

苦痛が伴なふてをる眞理追究心を有したまふて、其孰れか好む處を與へんと申されたらば、アヽ神よ、われは右の手ならざる左の手のものをと懇願せん」と云はれたが、實に吾人も亦レッシングの後を追ひたひものである、而も人生の或部分に關する眞理が明らかにせられたことは爭ふべからざる明々白々の事實にして、これをも放棄してその左の手とは申すまじ。

斯る意味よりして吾人は人生に對して不全完を唱ふるのである、人生の有の儘なる狀態は不完全である、この不完全なる人生の生活に居るもののために少しく注意すべきことがあるすゝんで之を說いてみよう。

一の飛行器を友人か貸與したとしやう、その飛行器に乘つて空中を驅けり、眼下に天下の奇觀を望瞰した、其愉快さはとても言語も

筆紙も及ぶものでない、然るに旅の終りになつて其飛行器を其友人に返へすとせよ、この飛行器を自分のものにせなければ悲しいのであつて、前に瞰下した景色の美を賞翫した時の愉快も全く悲哀とせねばならぬのであるが、よし、其器は友人のものなればそれを友人に返へしだ所で、快なりし景色は確かに快を與えたのではないか、既に與えられたる其間に受けし樂みは樂みでないと云ふの理由がないのではないか、人生々活の間に相前後し、交叉して現はれ來る愉快なことも亦それ自身に愉快で、よしその愉快が一時的であつても、其一時的の間は愉快であることは少しも異なるべきことはない、愉快なことが失はれたのは、單に自分のものならざる飛行器であるから、之を其持主に返へすのは當然である、よく佛教の人々が紅顏の美少年も白骨となる故に紅顏と思はず白骨と

思へよと云ふのをきくが、若し人がいつかは白骨に化する時があ
る故に紅顔の時にもこの事によりて修養の機會を失しないやう
にせよと云ふのならば、よく其理が了解されるのであるが、若し之
が紅顔の美少年即ち白骨のやうにみて、其青春の快味を全然遺棄
せよと云ふのならば吾人は余りに其說く所の偏したるを笑はね
ばならぬのである。きはめて不淨なる身をきよしとおもふ、これ甚
だをろかなり、知らんとおもはゞをのが身のうちをさぐり見よ、な
がく細き骨節々を鎖ぎ集めたるにふとくほそき筋そのつぎめつ
ぎめを鎖りあやつりて、それにあかき臠を絢ひ、うへに白き皮をは
れり、首には腦を入ていたゞき、服には臟腑を裹みてかゝへたり、何
處か一としてきよき所ある、たとひ海水を傾けて淨ふともいかで
か清深なる事をみむ」とやうの論じかた、吾人は暗黑面をみずして

寧ろ光明の方面をみたいと思ふのである、光明と暗黑とは相對照
してこゝに一種言ふべからざる妙趣のある事は申すも愚かなこ
となれども、只暗黑的觀察をなさねばならぬことはない、それより
も寧ろ光明的觀察をした方が眞理に近きを覺ふるのである、吾人
は人間の身體をみて、其奧妙なる智識でなければ到底こんなに巧
妙に組織せられざることを感ずる、人體美をみると云つたやうに
人生の光明の方面をみる、否悲哀さへもその歡樂の意義を深から
しむるものとしてみることが出來るのである、而してその歡樂は
單に一時的であつても、それ自身に價値がある、其處に美と善があ
る、セネカと申せば羅馬の有名なストアの哲學者である、彼が言葉
も亦次の樣に申してゐる、「物が取去られて悲しむ時、吾人は寧ろ、そ
れが吾人に與えられたのを記憶するのがよくないか、吾人が物を

持つてゐる間は、よいが、爽快な朝――それは爽快であつたでは
ないか、壯麗な日の出――それが終日續いたと同樣に、只その一時で
既に壯麗ならざりしか、いや、若しそれが終日同じ樣の美麗さであ
つたら、それを美麗と考へたであらうか」と云つたやうな風な意味
を申してゐる、或人の家は不幸續ぎで一家のもの皆、歎息の聲を發
し非常に不平を洩し、寧ろ人生を呪ふのである、而していつも〳〵
彼等は幸福の來らんとすること、財産の沸き出て來ること、を
望んでゐる、無論不幸續きと云ふが見出さんと務むるならば、其不
幸の出來事の間にも必ずしも幸福な出來事が只一時的にせよ現
はれざることはない、これをも全然みることが出來ない、然るに其
或人は全く他の人々とは異つて非常な樂天家である、何時も申し
てゐる、若し幸福許り續いて來たなら、幸福と云ふものがないやう

になるであらう、不幸なこともよく味つてみて置かねば眞實の幸
福がきても、それを誠に味ふことが出來ない、實に斯る人は幸福だ
と云ふことが出來る、吾人は人生の不完全をよく味つて知らねば
ならぬ、ことに眞正に人生に現はれ來る快樂の快樂たることを悟
ることが出來るのである。

吾人は果して得たものを失ふのであるか、美は失せ、善きことはな
くなると云ふが、果して左樣であらうか、吾人には記憶と云ふ大切
な心の働がある、之を再現して行くことが出來る、力を之に加ふる
なれば、益々進歩することが出來る、吾人が智識も感情も意志も益
々成長するのは何の爲めであるか、一の經驗に他の經驗を重ね、重
ね〳〵てこゝに豐富なる智的生活も、感情的生活も、道德的生活も
營まれるのではなからうか、斯く考ふれば、一として失はるべきも

のはない、經驗を活すと活さゞるとによつて、こゝに偉人と凡人との差が生じてくる、而して斯く考ふるならば歩一歩に經驗は吾人を向上せしめ、富ましむるものでないか。

單に記憶と云ふ位でない、吾人の人生そのものが一つ〳〵積み重ねきた煉瓦の大厦ならばその經驗が吾人を築き上げてをると申しても余り過言でないかも知れぬ、吾人の人生々活の各纖維がみなこの過去に得たるものゝ香を止めて居ることが解せらるゝ、幼年時代より青年時代、中年、老年と漸々進む、七年にて細胞的組織を一變化さすと云ふことをきくが、これは事の一方面的觀察で、全面をよく觀察する時には一として失はるゝものはない、變じこそすれ、その變ずるのも決して突然と無意義に起るものでない、必ずや其進行すべき道程を通つて行くので、これが前のものが後のもの

となると云ふ所以である。

變化と申す中に既に言ふべからざるの妙味を藏してをる、不完全なる人生を說くに諸業無常を以て之を論ずるものがあるは、はかない、劫久的でない、常住でない、いつも變化して止まないのである。

變化は一の大なる興味を具してをるのではなからうか、進化も亦一の變化にすぎぬではないか、變化には必ず無常なことを伴なふてをると考へらるゝが、進化にも亦この無常を伴なふてをるではないか、或ものは失はれ、或ものは滅び行き、或ものは消え去ると云ふ、これが諸行無常と云ふ言葉の中に一種悲愁の調を傳へてをるのであるが、進化にも亦、この悲調を傳へてをるものがないとは云へない進化とは、蟬脫の意味ではないか、人類となれるまでの進化の事實は先づ論ぜずとするも、既に人となりて世に現はれ出てた

る後のことを考へても、漸次進化の形跡を辿りて種々興味ある問題を引出すことが出來るが、其進化せると云ふことは、前のものより一層高く、一層麗はしく、一層より善く、一層眞理らしくなれることを云ふので、之と同時に他方には或ものを脱ぎ棄てたものがある事實を拒むことは出來ない、物質的生活より精神的生活にすゝめりと云つたならば、既に其事實の中に物質的に偏した所がなくなつたと云ふ意味は包含されてをるではないか、ポーロが書いた、哥林多書の中に「愛は永久も墮る事なし然と預言は廢り、方言も息み、知識も亦廢らん、我儕の智識全からず、預言も全からず、全きもの來るときは全からざるもの廢るべし、われ童子の時は語るところ童子の如く、識るところ童子の如く、慮るところ童子の如くなりしが成人て童子のことを棄たり」云々とある、これを直ちに萬物進化

の實際に適應すれば、未だ進化の幼稚な時は語る所、慮るところ、幼稚なりしが、漸々其道をすゝみ、一層完全の方に近づくと云ふのは、前のものを脱棄てゝ行くことを含んでをる、棄てられたるもの、取放たれたる事情の方面から觀察すれば、こゝに不完全と共に悲哀があるではないか、人は不用なものに對しても尙ほ之を遺棄する場合には未練があるのは誠の人情の自然である、しかし之を蟬脱しなければ即ち進化はない、それで、この變化は確かに一の悲哀と不完全とを感せしむるものであるが、他方に在りては、之を喜ぶべき充分の道理があるので、若し變化を眞に悲しむとならば、それは退歩し行く、進化ならざる退化をこそ悲しむべきである、再び小兒になりたい、と望む人がある、それは無論人生の錯雜紛糾せる間に立つのが厭なからであるが、さて凡ての成人の記憶をなくし

て再びもとの小見に退歩することは望まないと云ふのである、斯る得手勝手な思想を以てをる人が多い、その變化の妙味を解するやうに務むるのは實に吾人の最も大切な急務ではなからうか。

人世は逆旅なりと云ひ、浮世は旅行に似たりと云ふやうな句は洋の東西にある諺草である、これは誠によくも人世を譬喩したものであると思ふのである、吾人は必ずしも壯麗なる宮殿や、宏大なる大厦高樓や、目を眩せん許りの美術的建物、遺物ある舊都許りでない、汚穢極まる小市街にも行かねばならぬし、其途すがら、蜂蝶嬉々として戯むるゝ百花咲き香ふ野邊の間を通過することもあらうし、怪禽毒虫の住む深林を辿らねばならぬこともあらう、野原に出るかと思へば丘嶺をも通らねばならぬであらう、橋も谷も、賑やかな街も、寂しき村落も、千樣萬態の風俗人情によれる社會をよぎら

ねばならぬであらう、人生の旅も同じことである、或人が云つた言葉に、人生は恰かも鍬を以て地を掘るが如しと、又他の人が云つた言葉は、人生は恰かも卷物を開くが如しと、自己の力によりて自己の運命を建設し行くものは後の言を眞理とすることが出來る、人生の前途に横はりて吾人が命運を漸次に彩どる不思議の力あることを經驗するものには前者を眞理とすべし、而して人生の眞實なる實相を云へばこの二者相交錯して、自力の及ぶ所と及ばざる所とが妙に相からみ合つて、時には自己の畫がける花鳥を白紙の上に見ることもあらうし、時には豫想もせざる夜叉の相が現はれ來ることをも見ることがあらう、又妙に自己の手で畫く畫が一種のインスピレーションに動かされてわが思ふよりも尙ほ他の風致あるものを見ることが出來やう、いづれにしても此等の時々刻

々に後を繼いで起り來る人生々活は恰かも旅の一處より他處に、一物より他物に移り行くやうなものである、この旅路に於て最も心すべきことは其趣味を深く味ふことである、觀察力の有無は旅の趣味を深くすると否とに大なる關係がある、こゝに注意する所があつたならば、人生の不完全は實に他の方面に人生を豊富ならしむる方法ではないか、羅馬の古き都の舊跡を見て、眞正の妙趣を味ふことの出來る人は、むさくるしき市街の事情をも懇密に觀察することの出來るものである、人生の悲哀と苦痛と寂寞の味を嚙みしめ〳〵て行くことが出來ないものはとても人生が解るものでない、或科學者には宗教の味を嚙みしめて行くことが出來なくて、人生の不完全な味が解らないでをるやうである。

全体人生の不完全なために滿足が出來ないと云つて悲觀してを

るものが多いが、こゝに人生に久遠の理想が湧いてくるものではなからうか、現在のまゝなる世界に滿足が出來たならば大變である、滿足することが出來ないから、一歩を進めやうとする、否數十歩、數百歩をすゝめやうと務むる、この世は確かに吾人よりも大きいのである、吾人は大人物が不完全を感じたことを知つてをる、この大人物は或人の理想である、その理想となつてをる其人が自ら不完全を感じたとすれば、そこに其人以上の或ものがあることを察知することが出來る、と觀察してみれば人生の凡ての方面に何時も發展して行くべき余地があり、其余地に進むべき努力が現はれてくる、斯くして人はいつまでも無限に、完全の神を愉悦してすゝむものである、こゝが誠に神の子たる品位が現はれてくる所である、人生の不完全、嗚呼人生の不完全、茲處に人の人として生活する

に最も大切なる力と賜物との湧出て來る源泉がある、人生の不完全なることによつて却つて吾人は神に感謝を捧げねばならぬのである。

飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。

雨過天清、會妙用之無碍。風來、雲去、得自性之眞如。

智者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。

(二) 病める人に

望ましきは身躰の强壯である。假令事業に失敗しても、困苦辛酸が逼つて來ても、この身躰さへ强壯なれば其中には再び事業も失敗を償うて成功することもあるだらう、富み榮えて快樂き生活を立つることも出來ようと、只身躰の强壯なるが賴みにて、浮世の激浪逆卷く間にも人生の小舟に掉すものが多い然るに、一朝の風邪が基にて不治の病に罹り、愈々醫者も匙を投げ、只死を待つより外ない境に至つたならば、花が麗しいとて何の嬉しからう。鳥の音が美しいとて何の樂しからう、せめて安らかに眠ることでも出來るならば幾分か心も靜まるであらうに、憶ひ起せば過去に犯した罪惡、果さゞりし義務、爲さゞりし善、悔緒亂れて煩悶に煩悶を重ね身躰

の病苦と共に此身を責めるかと思はれる。

數年の辛苦艱難、漸く其目的を遂げて米國〇〇大學を優等で卒業し、洋々たる望を有つて歸朝し、或學校の教師に雇はれ、同輩よりも推され生徒よりも尊敬されて得意の生活を送れる友人がある、所が一朝强壯と誇つてゐた夫人が脊髓勞に犯され、名醫の診斷の結果によれば、いよ〳〵不治の病氣と定められた、外見では衰弱して只血色の上がらざる所などは、確かに病人であるけれども、其髓の灰白質が自然に變色して果ては生命を奪ふ程だとは思へない、夫は醫師より其事をきいてよく知つてをる、レントゲンのX光線でみてよく髓漿の褐色を知つてをる、屠場に行く羊のそれならば墓場にすゝむ愛人の狀態をみる辛さ、未だ稚き三人の小兒をもつてものの力ぐさとして其情なさ悲しさを忍んで居る、偶々友人の見

舞を受けても病氣てふ言葉さへ談さぬやうに、妻の耳に入れぬやうに務めて居る、嗟吁病氣てふ言葉をきくさへ腸を斷らるゝ切なさ、人生の希望も快樂も今は消え亡せて唯頼むは精神の慰籍者たる、神のみである、彼にして宗教なくば失望の淵に沈むは必然であらう。

國家のためなれば遺憾なしとは思ふものゝ、深夜人靜まり傷の痛みに眠られず過去を思ひ未來を考ふる時に、思へばとて及ばぬ事ながら、何故に彼の時受けし砲彈にて呼吸の根は止められざりしか、氣絶して居つた吾れを助けて、野戰病院へ運び歸つて呉れた戰友が恨めしくなる、家に殘した三人の小兒、虛弱の妻、それに年老いたる父を腕一つにて支へし身が補充兵の召集に應じて、戰地へ赴き、氣にかゝらぬではなかつたけれども、尙武會や後援會で家族を

扶助するときいて幾分か安心をして居つたがこの故郷に後送されてきけば親族もそれ程には構つてくれず、殆んど饑餓に逼らん許り。全快して病院を出る時が來たとて全くの癈物、勞働どころか、他人の厄介、一層死んで居つたらこんな憂き目を見ることもなかつたらう、一家の貧苦、わが身の苦痛、いかにせば逃るゝことが出來るか、嗚呼われ世に生れざりせばかゝる苦難はなかつたらうと思はぬ時はない」と潸然として涙を流された兵士があつた。

病氣は困苦貧窶を伴ふことか多い、貯蓄のある人ならばいざ知らず、世の多數者は病氣のために一家の困難をますのが普通のやうである、不治の病に犯され、其上家族には貧困の苦難逼り來らば、病者の心中尙更に察すべきである。

病氣は心の煩悶を伴ふことが多い、他人に迷惑をかけ不義理を働

いてゐても、身躰さへ强壯なれば何時か償ふことも出來るであらうと期してをつたのが、愈々不治の病に罹つた時、最早報いるをも無くなつてしまひ、こゝに、人知れず犯せる罪惡の念、骨も慄ひ肉も戰く程に思ふのは當然である。

「我は苦しき月を得させられ、憂はしき夜をあたへらる、臥ば乃ち言ふ、何時夜あけて我おきいでんかと、曙まで頻に輾轉ぶ、わが肉は蟲と土塊とを衣服とし、我皮は癒てまた腐る。わが日は機の梭よりも迅速なり、我望む所なくして之を送る、想ひ見よわが生命は氣息あるのみ我目は再び福祉を見ることなしじ」と叫ぶものは昔時のヨブ許りでない、この苦痛、失心の場合に「我ら神より禍祉を受るなれば災禍をも亦受ざるを得んや」と云ひ得るものは多くない。唯神を信ずるものには、福祉も災禍も等しく神の深き御旨によりて行は

る、ことで、彼を信じ彼に頼るものには、災禍却つて福祉となることを悟ることが出來る。

人の最も貴ぶべき所は其靈の高潔なることである、肉躰の健康なることのために屢々靈性の修養を怠ることが多い、事業の成功のために品性の墮落を招くことは尠なくない、病氣は猶太人の信じたやうに必ずしも罪の結果ではない、併し病に罹つたことによつて肉躰の頼むに足りないこと、物質的快樂の無益なることに氣がつき、靈性の完全こそ人の尤も貴むべきものなることを悟る機會となつたならば、其人に取つては病氣は實に人生の價値を認むる基となり、やがて己が罪惡を悔い、慈悲深き天父の懷に抱かるゝことを望むに至るのである、神は其子を愛する程その苦を增したまふ、苦痛は神の愛の證據である、「靈の父は我儕に益を得しめて其聖潔

に與らせんがため懲むることをなす、凡の懲治今は悅ばしからず反て悲と意はる然ど後これに由て鍛錬する者には義の平康なる果を結ばせり」(希來伯書十二章、十、十一節)と考ふるやうになる。

神の慈愛を深く心に悟れば、病も亦神の慈愛の一の表現と觀ずるやうになる、骨痛み肉惱むのは、却つて神に近づくの栞となる、多くの義人は、病患によつて益々神の愛を深く知るやうになつた、アウグスチンと申す基督敎界の大人物は大病を患ひて悔い改めの道に進んだ、信仰ある人は病に罹つて却つて信仰を篤くする、こゝに大磐石の如く動かざる敬虔の安心を建てる、(我不敏なりと云へども請ふ今より我が信念に隨ひ只一心に我が全能者の聖手に縋らん」と云つて、爾來七年有餘、死生の境を徨ひしも一回も醫師を招かず、明治卅六年一月の如きは、晝夜劇しき大喀血十八回に及びしも

亦其命を保ちたりと云ひし故德永規矩氏の如き經驗をするものもある、總てを神の御手にまかするやうになれば大概の病氣は其精神に避易して重くならないやうになる。

病の重り行くのを生理的の方面計りから考へるならばそれは間違つてをる、精神の持方一つで、病の癒ることは其例に乏しくない、身心相關の理を研究する科學が非常に進歩した結果、催眠術（ヒプノチズム）の如きは非常に其効能があることを認めらるゝに至つた、病氣を催眠術で癒す理は全く患者の精神に術者が感化を與へ、其精神の働が疾患のある部分に生理的變化を起させると云ふことに在る、予は屢々意志の薄弱なる人に催眠術を施して喫烟を止めさせたことがある、又リユマチスを治したこともある。必ずしも術者に催眠術を施されなくとも、其道理に叶つた精神の力が强くなつて、肉體を

仕配するまでに至れば、病氣が癒るやうになるのは、決して不思議ではない、神に靈を托して精神の大安心を得、靜かに病に對するならば不治の病と稱するものも必ずしも治らざるには限らない、悶え、惱み、悲しみ、煩ふ時には輕き疾病も重くなるに反して、煩悶の根を絶ち、全能の愛の神の懷に泰然と眠る時は病氣の苦痛が去る許りでなく、病氣も漸々快方に趣くことは明らかなる道理の承認する所である。

神を信ずる人が病に犯された時は、「神の懲したまふ人は幸福なり」と思つて、其痛苦懊惱を忍ぶにやすきを覺える、而して尙ほ深く神に接するやうになる、神を知らざる人も自然に眞面目となりて神を求むるやうになることが多い、友人の死はルーテルをして宗教の眞髓を深く究めしめ、それが十六世紀歐州の天地を震盪せしめ

た宗教大改革と開つて有力なる素因をなせしがごとく、人の病氣は神を求むるの大動機となり、從つて大宗教家を起したり、大革新を精神界に促す人を起たしむること抑は珍らしくない、斯の如き偉大の類例はさて措いても、其人の一生涯を新たにし、幸福になす基となることは實に夥しい。此頃一人の教育者が、中症に犯されまし た、其人は二十餘年間、同じ學校の校長をして居り、教育社會にも人望があり、生徒からも信任されてゐた、併し、人格の上より言へば、まだ壯高な氣高い人といふことは出來なかつた、彼は生徒の倫理教育に就ては殆んどなす所を知らなかつた、然るに一朝死生の境に往來するやうな最大事に遭つて、あゝ精神を托するに所なしと歎息し、煩悶の結果神を知るに至つた、それから、病氣も快方に趣いたが未だ充分に校務を取る迄には往かないけれども其人の凶性

は全く一新して高くなり、安心を得て生徒に對する德化も口に言はず敎へずして著るしきものがあるやうになつた、病は確かに神を知るの機會となり、人格を大きくする基となつたのである。教育の目的は品性を建設するに在り」と言へば、此人には病が即ち教育の大目的を成就させたのである、數十年の教育がなし遂ぐることの出來なかつたことを病が成就したのである、この人一人ではない、病が人を造り上げる基礎となつたことは、歴史の上に、天の星よりも少なくはなからう。

疾病が世に齎らす祝福を數ふれば限りがない、間接に世の平和、改革、慈善事業、社會事業等に及ぼすことを列擧するならば、到底其煩に堪へざる程夥しい、盲啞院の事業が何のために起り如何やうに發達するか、孤兒院の働が如何なる境遇より盛んとなり天地に孤

獨頼るなき兒童を救ひ世の犯罪の幾分を減じつゝあるか、或る宗教的活動が起つて、多くの悲愁憂鬱より人を救ひ罪惡より人を救けをるか、實に筆紙の盡き盡す所でない、今一二の直接の祝福を述ぶれば、人に同情心を起醒させる事である友人に初めて齒痛を病んだものがあつた、而して私に「妻がいつも齒が痛むと云つて顰顔をしてをつたが成程自分で齒を病んで其痛さが解つた、ほんとに人の齒痛に同情を持つことが出來るやうになつた」と語つた。同情心を擴ぐればこれ愛である、神は愛なりと基督教では說いてをる、病は確かに神を知るの最好機會を與ふるものである、同情心は慈善事業の最大要素である、病は慈善事業の最大動機である。

病は輕浮なる榮華や、富の賴むに足らざること、虛僞の生活や物質的快樂の無益なることを悟らしめ人をして眞面目にならしめる

ものである天眞爛漫ならしめるものである、眞正の衷情の貴きことを悟らせるものである、斯く考へてみれば病氣は災禍を齎らす惡魔ではなくて、眞正の祝福を來たす天使ではあるまいか。

病氣に犯されて人生を正しく觀察するやうにならざる人は實に禍なる哉と叫ばざるを得ないのである。

> 用實立に誠を帶として腰に結び、義を護胸として胸にせなかて
> 當て、和平なる福音の備を履として足に穿、信仰の盾を
> 取べし

爲道好學、守死善道、天下有道則見、無道則隱。

(三) 苦痛の意義

呱々の聲を擧げて、世に生れ阿呵の叫をなして世を去る時まで人生は苦痛の堆積であると說く者がある、否、曾にこれのみならんや、天地自然は苦痛に呻吟つゝあるのである、人生は只單にこの苦痛、懊惱の大波の一連にすぎずとするものがある、これはやがて哲學としては厭世哲學を形成してをる、果して之は事實の眞相を穿てるものであらうか、若し之が事實の有の儘を言明した眞理としたる所で、之がために人を呪ひ、世を厭ひ、宇宙に神なしとせざるべからざるのであらうか、これは心を平になし、氣を靜かにして考へねばならぬ問題である。

科學の進化につれて人智の啓發、人情の優美になつてきたことは、

慾ろくべき程である、醫學の智識は未だ幼稚といふものゝ、この五十年許の進步と云ふものは著るしきものがある、日本人が歐米の文明に接觸する初に人心の上に一大勢力ありしものは醫術であつた、闇法醫と云ふことは最も普通に歐州の文明の恩惠に導びく導火線となつたやうである、而して日本に於て最も早く眼をつけて輸入し、又一大祝福を生活の上に蒙らしめた恩人が醫學であることは爭ふことの出來ない事實である、其進步も亦顯著のものがある、無論未だ其開拓すべき範圍が非常に廣いことも爭はれない、赤痢の特効藥は漸く發明せられたが、未だ脚氣病に關しては其病原さへ確實に明らかにせられてゐない、又血淸治療法と申せばヂプテリヤとか種痘とか云ふやうな工合に世人も其功能の確實なことを認めるやうになつてをるが、肺病に對してのコッホ血淸法

も餘程怪しなものである、今ではこの血清法より他に移り行かんとしてをる、と云つたやうに未だ進歩の餘地が擴がつてをる、醫藥の方面でも適當な藥劑に關しての智識は實に憐れなものである、而かもこの藥が病氣の際服用された以後の變化上の詳細な點は未だ暗い、タカヂアスターゼみたやうなものが、實驗上化學的變化を澱粉に及ぼす能力と云つたら驚ろくべきであるが、これが人の體内に服用されて果して、斯る有樣で行くかと云ふことは確かに答ふることは出來ないであらう、治療の方法にした處が、藥を用ひることは今日の醫學上可成少なくして自然的の治療法を採用せんと務めてをる、催眠術などの心理療法が非常の効力あることを認めらるゝやうになつたのは僅かにこゝ數年來である、發熱のことを一寸申してみるなれば、白人考許でない今日までの醫學上の

傾向からして從來の人々は發熱の甚だしき際、下熱劑を與えたものである然し新しき醫學の上よりすれば發熱にはそれ相當の發熱を要することがある、それはこの熱によりて黴菌を殺さねばならぬ、その菌を殺すために熱が必要である、それで熱のために精力をひどく消耗さするか、他に餘病を誘起することを恐れざる場合には可成下熱劑を與えざるやうになつてきたと云つたやうに非常に總ての方面に渡りて不充分なる點が多いが、兎に角、前百年に比したらば總て其進歩は驚ろくべきの至りである、それに看護術の研究と云ひ、產婆術と云ひ、病氣に關する學問及び技術の進歩許りでない、此等の學術上の發展に伴なふて發達することは人の必の優しくなつたことである、同情の念が深く厚く廣くなつて、他のものを助けてやりたいとの考が發達し來つた、智識の進歩には同

情の深さが伴なふて增してくるものである、これが即て人間社會に苦痛の感を增大ならしむるものである、斯くて科學的研究に心を用ふるもの、又科學的研究の結果に眼をつけて萬有を觀察するものは自然に苦痛、懊惱の普遍なることを唱えんとしてをる、「見よ下等なる生活物より高等なる動物に至るまで悲慘の光景に仕配されてをるのを、生存競爭、適者生存の原理は森羅萬象、殊に動物界の實際ではないか、生存競爭は啻に同種族のものゝみに限るべきものでない、同種、異類相反目し、相呑噬し、相搏ち、相食み、血腥く、苦痛と死とは其常態である」と。科學は敎ふるのである、而して事實彼等活物は斯る苦痛を經驗してをるかと問はゞ、否、これは人の同情の眼が其實際を誇大にして、人と同じやうな感情と智識とを彼等に持たしめ、彼等をして事實以上に其苦痛を感ずるごとく表明したのではあるまいか。果して事の眞相は如何であらうか。

進歩した人と未だ野蠻の狀態に止まつてをる人との間に於てさへ、感情は非常な相違がある、神經系統の發達よろしき人と否らざる人との間に於てさへ、物を感ずる能力は非常である、敢んや動物と人との間には天淵も啻ならざるものがあるのではなからうか、動物によりては體を二分されても其部分〳〵で生活を營むことが出來るものもある、中學校に在りし日ナショナルの三を讀んだが、其中にアンヂーと云ふ男子が蚯蚓を二分した處がその二つとも別々に挨拶をして、土の中に入つたのをみて非常に驚いたことを書いてあつたのを記憶してをる、それで大概の學生はこの物語によりて斯る蚯蚓みたやうなものが其生活が極單純なものであることを察し、同時に體を切斷してさへ尙ほこれが彼等には苦痛で

ないことが解せらるゝであらう、若しこれが吾人であつてみれば如何であらう、僅か指先を痛めた許りでさへ非常に苦痛であることが味はゝれる、しかも足の一本も切斷するとなれば實に其不便と苦痛とは大きくあるべきので、これが即て其人の生命をも奪ふ大悲慘の原因ともなるであらう、之に伴なふの苦痛悲哀、困難辛苦、愛愁凄慘は誰でも察するに困難はないのである、然るに實際下等動物にありては之が差程の苦痛でない、と申したりとて決して動物愛護の精神を害する考ではない、動物愛護會は予の最も趣味を感じ、力を盡さんと欲して居る事業の一である、これには予の一箇の意見としては動物を愛護するのは人としての當然盡すべき任務で人間の同情心、愛心が發達して神の愛にも偏しきやうにならねばならぬからと云ふのが第一の根本理由である、動物が可愛相

であるからと云ふ許りではない、完全なる愛と同情心とを有するは人の人たる責任である。この愛心と同情心とを蒙るべきものが果して其同情心に値すべき苦痛の狀態にあるか否かは寧ろ第二のことである、既に人としては全宇宙を包むの愛を有する所まで發達すべき責任がある、この人としての責任上愛が自己を愛する人のみに止まらず、敵をも愛するに至り、其愛が動物より尙ほも進んで非情なる天地自然のものに至るやうになるのは予が理想である、されば動物愛護の事業はこの人としての愛心を完全ならしむる一の機會ではないか、斯く考えてをることをこゝに讀者は記憶してもらひたい、しかし事實は亦事實として明晰ならしめねばならぬ、動物が人のやうな感情を有せざることは明らかである、それかと申して彼等を虐待せねばならぬと結論すべき要は毛頭も

ない、而して事實の彼に苦痛懊惱が彼等を其根底から支配してをるとは如何にしても考ふることは出來難いのである。

こゝに一つ考へて興味のある問題がある、それは赤兒の泣くことである、全体大人が泣くと云へば其泣くに至る原因には苦痛がある少なくとも苦痛に類すべき事件が其聲の後に隱れてをる、恨むこともあらう、怒ることもあらう、悲しむこともあらう、痛ましきこともあらう、齒痒ゆきこともあらう、其等のことが原因となりて涕泣流涕するのである、それで泣くと云ふことは直ちに何等かの斯ることを聯想する、しかし未だ世の辛慘を見ざる赤兒が種々委曲せる情操の上より泣くと云ふことは考へられないので先づ泣くと云へば何等かの苦痛があるのであらうと同情し、直ちに乳を飲ましむる、抱き上げる、しかし赤兒は乳をのましむるには初めは二

時間置いて、最早四週間にもなれば三時間位を間置いてとか云ふやうな、生理上に注意すべき點がある、それに又彼等が泣くのは必ず其苦痛悲哀などからのみ來ると云ふやうに考ふるのは誤謬である、それにも關らず、泣けば直ちに抱上げる、乳を飲ましむると云つたならば、赤兒を弱くする、惡き習慣をつける一大原因となる、これは時には小兒の成長を止むることゝもなる、これが所謂甜牛の愛と云ふもので眞正の愛でない、と云つたからと申して余りに規律に許り拘泥せよと云ふのでない、しかし兎に角、吾人は吾人で直ちに總てのものを忖度せんとする傾向に流れ易いものである、斯くて世に苦痛を見、世を苦痛化して考ふるのである、厭世家が快樂そのものを直ちに苦痛視するのは笑ふべき誤謬であるが、吾人日常の生活にもこれに類したことは決して少なからざることであ

る。

苦痛とみえて、實際其境を味はつてみれば苦痛でないことのあるのは種々なる人の實驗談によりて學ぶ所である、一二の例を擧ぐれば、亞弗利加内地探險家として有名なるリービングストーンは一度獅子に攫まつたことがある、其時の實驗を語つて曰ふには、「獅子が其前足で攫だ時は只死を待つのみであつたが少しの苦痛もなかつた、どんな風になつて殺さるゝのかと云ふ好奇心が強かつた」と。斯る場合を單に想像すれば苦痛が充ちて居るかと思はれるが實際は左樣でないことを表明してをる。

知人で某大學の教授をして居るものがある、彼は三度死んで三度甦つた經驗を有してをる、其經驗を語りて、一度は殆んど三日の間人事不省で、人は皆死せりと考へた程である、それを父なる人が米

飯を焚めて其冷たき身體を温包し、遂に蘇生せしめられたが、其過つて毒藥を飲んだ瞬間は何か非常に暑いものが頸に觸れたやうな氣がするや直ちに云ふに云はれぬ黑さを感じ、次に深紫色を見たかと思つたが其後は何ともなかつた、と云つてをる、又一人の知人は河に入りて泳いでをる際、何かのはづみに足に痙攣を起して溺死せんとしたが、ドント河底に足の觸れたと思つた後は如何にして死するかと考へたのみで、苦痛も恐怖も何もなかつたと談したのを覺えて居る、かの有名なアルプス登山家のウヰムペルは一度二千呎の斷崖の下に落ちたことがある、幸に雪が柔かであつた爲めに生命を拾つたのであるが、其落ちた時最早死することゝ覺悟したがこの死は何等の恐怖を生せしめない、否寧ろ如何な工合で其最後が近づいてくるであらうかと、好奇心に駆らるゝのみで

あつたと云つて居る。死と云へば人生の最大苦痛を聯想せしむるのが常である、然るに其境に臨める人の實驗は殆んど同じやうに苦痛、恐怖のないことを證明してをる、此等をこそ味はなければ其實を知ることが出來ないことゝでも云ふべきであらうか。

苦痛が下等動物の間にあると云ふのは誤謬である、否高等なる人間のうちに在りても野蠻人の間には苦痛は少ないのである、彼等のうちには同情の念が發達してゐない、親子の愛などでも餘程進んだ上のことである、子の可愛いと云ふことは殆んど天性かと思ふ傾向が吾人の間に在るが、これさへ後代進化の結果にすぎぬ、野蠻未開の時代に在りては子を愛すると云ふことを知らなかつた形跡が色々證據立てられる、從つて彼等は自己以外のものゝことを考へない、同情しない、自己の慰藉と快樂と利得との外は餘り思

はない、利己主義、いや主義などゝ大袈裟に云ふべきでもないが自己中心主義が野蠻未開の人と相伴なふことは明らかなことである、利他主義、他愛の思想は明らかに人の進化に伴なふことである、從つて苦痛と云つても其意味が極く淺薄である、苦痛のないと云ふことは、斯く考へ來れば未開野蠻を脱したものゝ中に在るものである、而して苦痛そのものが必ずしも惡いものと云ふことの出來ないことは明らかではあるまいか。

こゝに一の矛盾の如く見えて深き眞理の味はゝれることがある、それは野蠻蒙昧の人の生活をやめさせて、文明人の生活を彼等に味はしむるとしたらば、如何であらうか、彼等は決して之を快樂とは感じないであらう、文明人の最も快樂なる生活であると考ふるものは彼等には最も苦痛なる生活なりと感せしむるのである、こ

れは、快樂が必ずしも高貴な生活でないと云ふことの一の證據であるまいか、これとは事柄は少々異つて居るが、餘程其間に類似のあることは、かの「學問あれば憂多し」と云ふ句である、智識なく粗野な生れながらの自然的生活は眞に樂しい、然し智進み、世間の人情を味ひ、人心益々高まるにつれて、種々なる事情の間に苦痛を味ふやうになる、これは苦痛が貴くして、快樂が賤しいことの一の證據として差支なからう。

苦痛はいつも向上の機會を與ふるものである、この一例として考ふべきことは貧困の苦楚は多くは成功を促してをることである、貧困は文明人の呪ふ生活である、而かも文明を促進さする活動を養ひし者はこの貧困の搖籃であつた、マルチノー博士が「前途を望むとき安易と快樂との如く人の心を牽くものはない而かも回顧

すれば苦難多く努力せる仕事位、快よきものはない」と、云つたが至言でないか、呪ふ所の苦楚は成功の基である、慊惡する貧困は猛勇心の礎である、願ふ所の悦樂は墮落の機會である、奪心的の富貴は懦弱に導びくの境地である。

苦痛が屢々人間の罪惡と過失との原因より惹起さるゝことは確かなる事實である、食ひすぎ、飲みすぎ、攝生法を敗りて放姿な、自墮落な生活を送ることはやがて疾病を生じ、苦痛の苦き味を嘗めねばならぬ、しかし之あるが爲めに一層重き過失に陷ることのないやうに用心する、警誡する苦痛を嘗めて神を恨む人があるが不敬虔も亦甚だしきものと云はねばならぬもう一層深く強き苦楚にすゝみ行かないための警誡を與えたまふ神は感謝こそなさねばならぬではないか。

罪の結果ならざる苦痛もより少なる苦痛によりて警誡を受くることがある前にも述べしやうに熱はそれに相當すべき黴菌のあるが爲めと云ふ、之を殺すに必要だけの熱が高まると云ふのは、其病氣が重大にならんとする前に其に反對する一の奮鬪として熱の苦痛が味はゝれるのであるまいか。

苦痛を感ずると云ふ、それが鋭敏であればある程、優美な、快樂を感ずるの感が鋭敏なことを表明してをる、少しでも調子の間違つてをることを感ずることの出來るのは確かに自己の裡にその優妙なる音樂を味ふ能力が養はれてをることを明らかにしてをるではないか、人心の向上し行く所が高い程、それを妨ぐるやうな苦痛は鋭敏に感ぜらるゝ筈なんである、完全なれば不完全を知ることが多い、不完全の意味がよく解せらるゝのは自ら完全の度を進めてゐるからである、われに卓越なる感情があるなればやがて之を少しにても害なふものは鋭く感ぜらるゝのである、苦痛は確かにわれに或る大なるものがあるからである。又苦痛は快樂の他にある證據である、苦痛の感が強ければ強い程他方に快樂の感が強い筈である、一色のみならば色はない、こゝに色があることを知るのは他に色があるためではあるまいか。

苦痛は神が人をして其今ある境地より一層向上せしめ進ましめんとの大なる攝理を廢してをると申さねばならぬ、苦痛さへも下したまふ、神は其恩惠の深きに誠に感謝するの外はない。

多欲何窮、知足眼前皆樂土。我生有定、識時身外總浮雲。

人智則志貴、志貴則計短。

(四) 事變災殃

「限りある人生の不幸に對し適當なる慰籍は只一のみ。いかに悲しく亂されてもわれらが運命の成行は、總ての出來事を善にかへつゝ其久遠の目的の中にぞ包む無限の愛と力とにみちたまふ神の御旨によるものぞ」と或詩人が詠じた意味で人生に起つてくる偶然の出來事不幸不運の殃害を考ふることが出來れば最早何も申すことはない。斯る信仰だにあらば人間運命の災殃變事も却つて神の慈悲を味ふ機會ともならうが、科學の進歩、智識發展の勢につれてこの信仰が漸々衰へてきた、彼等は物の眞底に善意あり智惠あるやと疑い初めてきた、それでこゝに事變災殃と云ふ題をかゝげ、世に起る種々の不幸事、人事界の偶然なる出來事について論

じてみたいと思ひます。私は此の事を充分に說明しつくす事は出來ません勿論いくら人間の知識が進んでも天地間の森羅萬象を遺憾なく說明する事は出來ぬのだから私の說く處も決して之等の秘密を痒き所まで說き得ないかも知れぬ、假令充分に說明し得ないにしても、其の問題を論ずる事が人生に必要であると思ふ、斯くて若し其の問題解釋に對する立脚地さへ吾等がにぎることが出來れば他に說明し得ない點があるとしても第二歩を蹈み出し得ると思います。災殃事變などの世の中に起り來り害惡の天地間に充てをるを見て、此即て神のない證據であると斷論する人が世には少なくない。不幸災殃を見て神の有無を議論する位でなく其の奥に大なる困難なる一問題が横つてをる事を知らなければならぬ即ち此の不幸なる出來事に宇宙の秩序と如何なる關係を有

するかといふ事である、神の慈愛と之等の出來事とはいかに說明することが出來るか、吾人の立場を確めてをかねばならぬ、不幸なる事件に出會つた時あゝ、神は慈愛深きか、否かといふ疑問は、基督敎信者の心をいためる處である。慈愛なる神の支配する世界に不幸災殃は如何なれば起るのか、事實兩立しない樣に思はれる少しく說明して見ましよふ。世の中に一の不思議な事だと思はねばならぬ事がある其は、世界が出來てから幾億萬年を經過してをるか分らない、然し宇宙のなかに整然たる秩序がある、宇宙は自然法に支配されてをるといふ事の說明は近々百五十年以來のものであるといふ事である、宇宙は自然法に支配されて活動してをるといふ事實の發見はつい百五十年來の事である、此の說明があつてから宇宙の森羅萬象の活動も說明されるやふになつた、此の科學の進

歩は多くの人に大恐慌を來した、特に宗敎家の恐慌は非常なるものであつた、科學界の多くの人々は科學の進歩はやがて宗敎を滅すものであると論じ來つた。私は斷言する迷信的分子を多く含んだ宗敎家、及び斯る基督敎信者に取つては確かにこれが一大打擊であるに相違ない、例へば、神に關する思想は希臘人がよく之れを代表してをるが、トロイとギリシアと戰爭して遂にトロイ軍の敗北に歸してトロイの勇將エニアスが逃げる其の間に種々な不幸に出合ふ其の消息を記述したエナイドといふ本に據つて見ると、トロイの全盛時代にパリスといふ一王子があつた或日王子の前で希臘の女神が三人で爭つた其の名はヘラス、アテネ、アフロヂテ、といふのであるが問題は誰が最も美人なるかと云ふ事である、審判者に擇まれたパリスは三女神に種々なる手をかへ品をかへた

誘惑を受けた、然しパリスは遂に美と愛の神なるヴエエス、アフロ
ヂテを第一の美人と判定した、するとヘラス女神は嫉妬を起して
遂にギリシア軍を向けたパリスの家のあるトロイを攻め落し、な
をもこれにあきたらずしてトロイの落武者エニアスの逃る道す
がらも苦めやうとして暴風の神エオルスを遣はして彼を追はし
めた、彼等希臘人の思想は人世の出來事には全然神が關係してを
ると思ふてをつた、神の怒は人世の苦難の根源で彼の悅は人世の
幸の因であるといふやふに思ふてをつた、猶太人の間にも亦これ
と同じ考があつた、ダビデ王が戰をしやふと思ふて戸籍の査べを
した、すると神はダビデ王の不信仰なる事を怒つてダビデ王に許
りでなく猶太國民全体の上に大なる不幸を下したといふ事は舊
約書のなかに委しく記されてある、かゝる思想は今日の基督敎信

者の間にも尙ほ殘つてをるが有名な美濃大地震のあつた時に根
尾谷といふ寒村は地の下に墜落してしまつた其の時基督敎信者
のうちに次の樣な說をなした者があつた、同村は罪惡を犯してを
つたから神の義罰に合ふて斯る不幸の出來事にあつたのだと、一
言にて云へば神が天地を自由に支配するといふ思想である、かゝ
る思想を有する者が科學の進步の結果信仰はなくなつてしまふ
のは當然である、不幸なる出來事が直接の神の行爲の發現である
と考へる事はやがて宗敎を迷信たらしめて科學の進步を呪ふや
ふになるのである。吾共は天然の法則を通じて神は顯現すと信ず
るので、天災不幸に對する吾々の考を話せば、宇宙秩序を通ふじて
神を窺ふ事が出來る秩序の神である天然の法則を徹し顯現する
か然し慈愛の神である、なぜか桑港の地震の如何に人類に損害を

及ばしたか分らない然しそれですぐと神の無慈悲を論斷する事が出來ますか、元來桑港の地は天然に地質學上地震系中の一地方で昔時のポムペイ、ヘリクラニユムと同じことである、彼等は只此の處で人間の快樂をむさぼり肉慾の滿足を見出す富源を得むとした。

天文學者は今日は天躰を證明するに一般星雲説を以てしてをります、即ち吾が太陽系は初めに火の塊であつたが年數の經過するに從つて冷却し始めた、即ち收縮した、こゝが此方彼方に散亂して火星水星地球といふやふなものが出來た、尙之等のものが收縮を續けて居つて(地球で申せば)其の表皮に裂目を生じて其の裂目から水が入たり、又内部の火氣が出口を見出して外部に出やふとする、そこで噴火其の他の作用がある、地震海嘯などは其一現象にすぎぬ、而して人は此の地は地質學上かゝる地系上にある事を忘れて、いたづらに無鐵砲に人間の便利有益即ち切利といふ方面から打算して壯嚴なる市街をなした然し何時かはくつがへされる事があるのは彼等には分らない、されば地震は進化の法則の必至のものである、これを直ちに神の義罰であるといふ事は實に不道理の斷定ではあるまいか、これは寧ろ人間の無知不注意の結果當然自然の法則圈中のものとなつたのである、一時瀕々と起つた鐵道電車事故等も其れのみ見れば人間に大損害を與へた然し、かくの如きものは人間と機械とに缺點があるといふ事を見ずしては説明は出來ない。無論死と云ふ問題がこゝに説明せられねばならぬがこれは題を改めて説きましやう。英京倫敦で一時流行病の猖獗であつた時に或る宗教家は之を神の義罰である吾々の不信仰の

應報であると說いて教會は其の赦を神に祈る爲めに集る處となつて道理の光の滅却しやふとした事もあつた。

かく述べ來つて最後に申上たい事はかゝる人世の不幸なる事は神の慈悲を疑ふことゝする處でなく吾人の進むべき餘地を開發する機會と思ふ事が出來ぬであらふか。

宇宙に一貫してをる道理の發見されたのはつい百五十年程前の事である爲めに多くの發明は續出して地球の表面は一變せん勢である、多くの不幸なる事に出會つて知識の戸を敲いた、開かられて茲に燦然たる文化が湧き出できた。人間の經驗は人間に希望を有たしむる、道理の發見自然法の發見はどんな幸なる事が現れ出づるか分らない。不幸なりと云ふ事件から人間の知識に開發されてすばらしい人世に幸いするものが現はるゝ、かくても我等は不

幸なる事件に合つて尙ほ神の御胸は深いかなと歌はずにをられやふか。

心跡双清、秋水長空、無限碧、形神俱化、春風和氣、靈歸融、

爾曹の身は爾曹が神より受たる爾曹の裏にある聖靈の殿なり。

ポーロ

道は天地自然の道にして人は之を行ふものあり故に天を敬するを以て目的となす天は人も我も同一に愛す故に我を愛する心を以て人を愛すべし

爾洲

(五) 試誘多き人生

「人の生涯には必ず何時かは、この世を死骸累々たる大戰場、限りなく永久に續く苛責の地獄、怖ろしき苦痛、悲哀の呻吟のやすむひまなき屠殺場であると、思ふ時があるに相違ない」とはかの碩學なる宗教家ドラモンド博士が其名著「人の向上」中に誌されたる言葉である、青春の若き血に炎え、希望の光明に照らされたる青年でさへ、「嚴頭の感」を樹幹に書つけて、厭世の身を華嚴の清淨なる瀧壺に投ずるものがある、予は二十七年日清戰爭の當時より名古屋の任地に在りて殆んど十餘年間教育と傳道とに從事して居つたが、其間、知人の中に於ても悲慘にして酸鼻すべき光景を見たことである、一人の友人が出會せる試誘を說けば、彼は某女學校の教師であつた、予が彼と交を結びし時は咲きこぼれたる百花爛熳の春光裡に、甘き蜜を吸ふ蝴蝶のそれにも似た、新婚の快樂に醉ふてをる當時であつた、それから彼等の間に赤兒は生れ、眞正の家庭の妙趣を味ふべき機も現はれてきた、其後一年位は所謂歡樂裡に過ごされたが、一日予が机上に擠らされた手紙は彼の近傍に住して余生を送りたまへる嚴父の吊問である、一ヶ月も經過せざる間に彼の義兄即ち其愛する妻女の兄の家は火災のために丸燒となつた、偶然其時其家に寓れる彼の妻は大怪我をなしたのである、夫れから病院に入院させる、未だ稚き赤兒は乳のないために弱る、其ドサクサ混雜の間に家では盜難に遭ふ、未だ二ヶ月とも過ぎぬに京都の旅行先で、夫を先立てたる母上は危禍に罹りて沒せられる、實に不幸は不幸を呼び、禍は禍を重ねられ、言語に盡すことの出來ざる悲哀

と同情の涙に暮んだことである。

三十九年、日露戰爭後のことである予は名古屋を去りて東京の教育及び傳道界の人となつた、大なる希望と抱負とを以て事業に當つた、現來、予は日本人が餘りに老成おつて運動などには少しも心を用ひない許りが較ともすれば運動を蔑視する傾向がある、この一大欠點を憤慨するものであるが故に、同感の畏友日比野寛氏が愛知縣立第一中學校長となつて予は其學校の教授の一人となれる日より、前にも增して、氏等と共にテニスを盛んにやつたものである、これの御蔭でもあらうか、身體は至極健勝にして、名古屋の十數年間、殆んど病氣を知らざる程であつた、然るに東京に來ては非機會が甚だ少ない、稀に愛知社の青年たちと共にコートに立つこともあつたが、仲々思ふやうに暇がない、それに種々心を煩はすべ

き問題が事業の上に現はれてきた、かの線弱蒲柳のチカダン的文學者にありと云ふ神經衰弱のために、殆んど一ヶ年間襲はれた、これも水浴のためにや、それとも他に種々なる原因ありてや一ヶ年の後には殆んど全癒するまでになつたが、其一ヶ年は實に非常の苦痛を嘗めた、ゴー〳〵ときこえたり、ビユー〳〵と云つたりする音がして耳鳴が烈しい、疲勞は早く來る、とても一時間と仕事を續くることは出來ない、女學校のことや教會の事業は益々忙はしくなる、眞にいやな〳〵憂き日を暮した、超えて四十年の秋である、數名の同志と共に經營したことは「新天地」と云ふ雜誌發刊と「世光社」と云ふ社會教育の機關とである、愈々計畫通りに十月に第一號を公けにしたが、こゝに思はざる打擊はわが一身の上に現はれた、と申すのは長女喜美子が百日咳から肺炎と變じ、生れて百六日目に

永眠したことである、予には兄弟は外に五人ある、父母も強健で、一家未だ嘗つて不幸を經驗したことがない、無論祖父母は永眠されたが、これは未だ十二三歳のをりと東京遊學中のことであつたので、近親中の不幸を目擊したことはない、然るに生るゝまでに殆んど十二ヶ月も母の胎に居つて、世にも稀れな健かな出生とまで產婆にも驚かれた子が僅かに一ヶ月も足りない病氣のために斃れたのである、誠に悲痛の極である、子を亡くした人でなければ到底その悲哀の程度は了解の出來るものでない、これによつて種々な敎訓を受けたが、實に悲痛は悲痛であつた、世には子を持つて知る親の恩と云ふが、之は未だ痛切な眞理を言明せる句でない、子が出來て種々に苦勞をする所から、親が自分を養育したのも嘸ぞ苦勞が多かつたらうと云ふが、親の子を育てるのには苦勞と云ふより

も寧ろ望と樂とが多く含まつてをる、殊に父親は左程之を痛切に感ずることもなからう、しかし其子が亡くなつた時程世にも悲しきことが外にあらうか、母も父も同じく其愁を切實に味ふのであるそこで予は云ふ「子を亡して初めて知る親の恩で」、子を亡しないまでは如何程強く深く其子を愛してをつたか、其愛を自ら計る機會が少ない、こゝに始めて其愛の深きを今更のやうに思ふのである、これが自分と親との間に引直して考ふることゝなるので親の恩愛がいと深く、海の深きよりも深く、山の高きよりも高いと書かれた意味も充分に解することが出來るいやこれは問題が側路に入つたが、斯る悲哀なる試誘が事業の門出に現はれてきた、續いて來れる問題は資金の不足である、雜誌經營のことが六ヶ敷いと云はれてをるが、現に實驗してみなければ如何程まで困難であるか

ゞ解せられぬ、第一原稿蒐集の困難がある、思ふやうに正確に時日に間に合ふやうに寄稿が集まらない、第二は其事業の最も困難なる資金であるが、全體雜誌の賣上金が返つてくるのは第三號を出した後のことである、第一號を大賣捌に托する、第二號までに仲々集金してくれない、第三號を再び大賣捌の手に渡して初めて其後第一號の代金が回收される、すれば雜誌發行に要する金は第一、第二、第三號と少なくとも三ケ月間に要する資本がなくては出來るものでない、而して原稿のことにせよ、事業の事務にせよ、餘程手腕のある人を用ひるでなければ失敗に終ることは當然である、既に第三號までの資金と云ふのがない、第二號の分さへ仲々困難であつた爲めに種々なる苦心をした、この途中の出來事である、十二月の第一日曜の說敎を終つて、翌朝一通の手紙が到着したのは、免職

のことである、「敎會に關する意見、少なくともこの意見を遂行し行く方法に關してミッションと御身との間に相違する所がある、さればミッションは御身の休職せられんことを希ふ、俸給は三ケ月分差上ぐべし」との意である、予は十有六年の間、この敎會のために盡す所があつた、突然の辭令、一時は驚きもした、しかし之には種々なる隱れたる事がある、今こゝには何も云ふまい、いづれ言ふべき時は來るであらう、宗敎界の事柄がいつも野心ある陰險な人によつて攪亂されるのは誠に慨歎の至りであるが、何處をみても左樣であると申さねばならぬ感がある、兎に角、予が一身にとりては一大打擊を再び加えられたのである、而していよ〳〵最後の最大打擊が頭上に加えられたのは、「新天地」の廢刊の止むを得ざることである、之に大なる損失の伴なうたことは言を待たない、或人が御世

辭に「君は小ヨブの經驗をなされました」とあつたが、實に泣顔に蜂とはよくも申したことである、人の上に試誘を悲しみ身が、自らの身に同じやうな實驗が來たものであたる、こんな試誘で全く失望するまでの薄弱な信仰を持つてゐるとは思はなかつたが、さて、愈々其境に入つてみれば、信仰もこれがために益々鍛はれはしたものゝ、仲々につらき思に沈んだことである、奈落の奥底に突離されたやうな氣もした、殊に人から、人と云ふ人は當になるものでないと云ふことも感じたが、又人情の美もこの境にてよく味ふことが出來た又所謂宗教家とか、同輩とか云ふものゝ血の氣もなんにもない、丸で空洞の中から鳴る、實のない音で說教をやつてをることも明らかに學ばれた、人は神の子である、同胞であると言ふ口の下から、自分の利慾のためには如何なる陰險なこともなすことを敢

てするものが多いこともよく知ることが出來た、われに利ある日は先生〳〵と云つて頭を下ぐる人は實に陋劣な、人を賣るものなることも解つた、人生の醜惡な方面は痛切に其眞相を暴露してきたのである、斯る境地に在る時が最も危機である、人情の奥の奥底に神の麗はしき尖光を認むることの出來ざる人が、この機より極惡な人と墮落し行くのは必ずしも無理でない、試誘の時程、眞正の信仰と理想を堅く握むことの必要を視ることは少ないであらう。

試誘は人が向上し行く程多くなり、其性質もいよ〳〵複雜にして且つ強くなるかと思はれる、小人程試誘が少ない、而して彼等は之を試誘と見ないやうな傾向を有してをる、試誘の意味を味ふた上に、それに打勝つて平安を得たのは狂嵐の怒り哮れる後の靜さの如き靜かさで眞正の平安が保たれてをるものゝ、只試誘に對して

之を試誘と思ふことなく無頓着なのは、今や怒濤を捲き上げんとするまへの小休息のやうなもので大破壞を目の前にひかへてをるやうな風に思はれてならぬ。こゝの平安は眞正の平安でなくホンの一時の偷安である。

盛んなるものは衰へる、希望滿ちたかと思ふまに失望の續き來ることは既に前にも誌した如く世間一般の常態である、波靜かなるガリラヤの湖水もレバノン山嵐に舟を覆すことがある、失望の黑雲に閉ぢこめられたる時は眞晝の太陽も尙ほ其雲暗々を貫くことの出來ない程に哀愁を感ずる、罪の重荷を負ふ時は欷歔、悲歎、煩悶、轉輾、焦慮等一も何等の効もないのである、一人の親が犯した罪惡の擠らす結果でさへ、其殃禍、屢々數代に渡り、幾多の人、之が爲めに苦痛辛慘の味を嘗めねばならぬことがある。

若し眼を上げて周圍の人々を詳細に觀察し、X光線的眼光によりて彼等が心中の秘密を讀むことが出來たら如何であらう、溫袍の裡に包まれ、榮華の間に圍まれ、子孫繁昌、商賈隆盛を極めてをるものでも、猶ほ神の恩惠に洩れて、人知れぬ靜寂の間に、沈默裡に、人生の煩悶を繼續して、祈禱も其心の痛を癒すことが出來ずに哀悼の涙に咽嗚ものが多いであらう、況んや其外圍の境遇にも困難を極め其心の傷、其骨をもわななかしむるものがあつたならば、其力よく之に耐へ得ることが出來ず、激しき日中の勞働者が夜の來るを待つやうに、死を寧ろ生よりも易しとするのである、人生の不幸悲哀思ふだも尙ほ胸を痛むべき程である。

眼を上げて歷史の上に誌されたる人生の悲哀をみんか、猶太王ダビデの生涯位煩悶、苦痛の活きた例が他にあらうか、

イスラエル王サウルの末年こそ實に可憐なものである、其登極の當時に得た所の盛大なる勢力は次第に衰へ去り、打續く種々なる失望のために、心神憂鬱、快々として樂まず、時には狂せんかと思はるゝ程であつた、そこで之を慰むるためにとて、高尚優妙な樂を奏するベツレヘム人イサイの子、ダビデは王の宮に召されたのである、初めは野の牧羊者たりしもの、今は王の朝廷に出でゝ人々の寵を得、又サウル王の軍に從ひ出でゝ多くの戰功を收めた、イスラエルの婦女たちは、この勇士の凱旋を祝して「サウルは千をうち殺し、ダビデは萬をうち殺す」と歌つた位である、暫時は歡樂と平安との間に、朝廷の勢力を得てゐたが、終にサウル王との間に隙を生じてイスラエル國民とエホバ神との敵なるフイリステア人と厚き交誼を結び、所謂好運の手綱を執りて戰へば勝ち、攻むれば取ると云

つたやうに何處に至りても成効せざることなき有樣であつた、しかし以前の恩人サウル王と、其王子にして彼が親友なるヨナタンの死せることをきいては、さすがに、其恩を思ふて哀悼の情に堪へず、歌を作つて其心を披瀝した、かの有名なる「弓の歌」(サムエル後書一章十九—廿六)はそれである、後自ら猶太の王位に登り、直ちにイスラエル國をも併せてしまつた、彼は其性至つて殘忍で、甚しく殺戮を好んだ、ベンヤミン人シメイはダビデを指して「血を流す人」と云つたが、蓋し適評である、又彼は利己的で、身自ら勇士にてありながら、戰場には只其軍隊のみを遣はして、自身では宮殿の裡に淫樂逸遊にして豪奢を極め、榮華を盡し、宮女佞臣等の媚に夢みてをることが常であつた。

彼の肉慾的なことに至つては實に驚ろくべきものがある、彼は公

々然姦淫を行ふて罪なきものを殺した、彼が部下の將にウリアと云ふ人がある、其妻バッセバの美はダビデの心を執へた、彼は如何にもして其愛を得んと企て先づ其夫ウリア將軍を、最も危險多き方面の戰場に送り、遂に敢なき最後をなさしめた後終に彼女を入れて後宮となしたのである、預言者ナタンはダビデ王の許に來りて曰く「某富有者あり、自ら多くの群羊を所持す、然るに彼の强慾なる、某貧人の所有する唯一の羊を奪ひ、之を屠り殺したのである」と、之をきけるダビデは其罪業を怒りて、之を罪すべしと宣言した時、勇氣ある神の人ナタンは嚴然として形を正し、王に語つて曰く「汝は其人なり、汝はウリアの妻を奪ひ、ウリアを殺したり」と明言したのである、嗚呼この日以後、ダビデの心は暫時の休息をも見出すことが出來なくなつた、過去の罪を思ひ出して歌つた調の悲しさ、句

の哀れも、讀むものも、轉た同感の涙に咽ぶのである。

エホバよねがはくば忿恚をもて我をせめ、はげしき怒をもて我をこらしめ給ふなかれなんぢの矢われにあたり、なんぢの手わがうへを壓へたりなんぢの怒によりてわが肉には全ところなくわが罪によりてわが骨には健かなるところなし、わが不義は首をすぎてたかく重荷のごとく負がたければなり、われ愚かなるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れたゞれたり、われ折屈ていたくなげきうなたれたり、われ終日かなしみありく、わが腰はことゞく燒るがごとく肉に全きところなければなり、我おとろへはて甚くきずつけられ、わが心のやすからざるによりて歎歎さけべり、あゝ主よわがすべての願望はなんぢの前にあり、わが歎息はなんぢに隱るゝことなし、わが胸をどりわが力お

とろへ、わが眼のひかりも亦われをはなれたり、わが友わが親めるものはわが瘡をみて遁にたち、わが隣もまた遠かりてたてり、わが生命をたづぬるものは蹄をまうけ我をそこなはんとする者は惡言をいひ、また終日たばかりを謀る、然はあれどわれは聾者のごとくきかず、われは口をひらかぬ啞者のごとし、如此われはきかざる人のごとく口にことあげせぬ人のごときなり、エホバよ我なんぢを俟望めり、主わが神よなんぢかならず答へたまふべければなり、われ曩にいふ、おそらくはかれらわが事により て喜び、わが足のすべらんとき我にむかひて誇りかにたかぶらんと、われ仆るゝばかりになりぬ、わが悲哀はたえずわが前にあり、そは我みづから不義をいひあらはし、わが罪のためにかなしめばなり、わが仇はいきはたらきてたけく、故なくして我をうら

むるものおほし、惡をもて善にむくゆるものはわれ善事にしたがふが故にわが仇となれり、エホバよねがはくは我をはなれたまふなかれ、わが神よわれに遠かりたまふなかれ、主わがすくひよ速きたりて我をたすけたまへ。

ダビデの老年は益々酸鼻の悲境であつた、獰猛なる獅子も毫して は衰へ、巨眼も其明を失ひ、鋸牙鈎爪も終に鈍れてしまつた、彼が家の亂脈なることは言語に絶する程である、長子のアムノンは異母妹タマルの窈窕たる姿を視て戀慕し、遂に彼を汚すに至つた、タマルの同胞アブサロムは剪羊毛祭の時アムノンを殺してしまつた、而して彼は家を逃れ去つた、後許されて父の宮中に歸ることを得たものゝ、心快々として樂しまず、隱かに人民の歡心を買つて父に謀反し、自立して王と潛した、彼とダビデ王との兩軍は戰を開いた

が、其結果彼は刺殺されてしまつた、ダビデ王が其後の數年間は混雜、悲哀、叱責、嘲罵、隱謀、讒誣、擠排等、あらゆる不吉の文字を羅列して表明するより外はない、爭鬪の聲喧しく、騷亂の叫聲囂しきうちに、とう〳〵病に犯された、彼が臨終は確かに罪惡の咀咀である。

苦痛、悲愁のダビデの生涯は人生の雛形である、少なくとも各人の生涯の孰れの點かゞダビデの生涯に似て居るのである。

試誘に打勝てる救主としての大宗敎家の傳記を觀察する時は、其間相通ずるものがある、救主的自覺を得る前には必ず大なる試誘がある、佛陀を見ても耶蘇をみても殆んど同じことである、只其試誘の性質に至つてはやゝ異なるものがある。

釋迦牟尼は精進勇猛の志を勵まして苦行林の中に棲める五人の比丘に從つて情を制し慾を窒ぎて修業をしたがなか〳〵正覺を

見出すことは出來ない、閻浮樹の下に兀座して難行苦行より他の道によりて心の寂靜を得んことを定め、それから河に入りて沐浴したまへる時は斷食のために五體痩せ衰へ昏死せん許りであつた、それから難陀姫の救助と自ら食物を取り給ふことによりていよ〳〵力づきて、此度こそは眞の解脫の途を見出さんとて、かの菩提樹の下に進み行き、其下にて修業を仕果せんとしたまふたとする天も地も歡をなし地に大地震あり、天には輝ける光暉り、生活物は皆喜び極まつて抃舞其處を知らざる程なりしと云ふことである、然るに五欲の大魔王はいよ〳〵自家の根據地が釋尊のために危〳〵なつたのを覺つて、其女の魔女と惡鬼羅刹の魔軍を率ゐて、佛陀を襲ひ來つたのである、先づ初めに颶風を呼び起した、暗、黑の天地、洋浪は怒り、風は狂ふ、其勢は誠にすさまじく身の氣も慄ふ程で

ある、しかし佛は端然として貌を正ふし、神色自若たるものがあるのである。

魔王は佛が禍に少しも恐れてゐないのを見て、此度は欲妃、悅彼、快觀、見從の四女を遣はして彼を妨げんと務むる、四女は其身を美麗に飾り、嬋妍妖冶、股脚を現はしたり、手臂は露出したり、又は鳧雁鴛鴦、哀戀の聲を出して佛の心を惱ましんとする、しかし釋迦は「形體は好しと雖も其心は端正ならず、譬へば蕎餅の中に臭毒を含むが如く、將に自ら壞れとするもの何の奇か之あらん、福は久しく居り難し、婬惡不善自ら其本を亡ぼす、汝等清淨種に非ず革囊に尿を盛りて來るも何をか爲さん、去れよ」と叱咤したまふたのである、佛佗の戰毎に勝を制する有樣を見たるパピヤ、マーラ大王は赫つと怒り、徧く六天及び八部に敕のりして釋迦の處に趣くやうにと

命じたまふた、そこで諸々の惡鬼は忽ちにして雲の如くに起り、怪面奇眼のものども林の如くに群り集つてきた、然しこれでも釋迦を降伏さすことが出來ないのを恐れた魔王は、寶冠を脫して地に擬して閻羅王宮の上に當て諸ろ〳〵の惡鬼に告敕した、汝等獄卒及び閻羅王、劍戟火車、一切閻浮提に向へよと。そこで諸鬼或は天界より下り、或は地獄より上り、合して兵衆をなすこと一億八千萬靈く皆畢波羅樹の邊に至つて、上に大雷を起し、熱鐵丸を雨らし、劍戟火車も交々空中に横つて、其火箭を燃した、しかし、終に彼を傷づくることが出來なかつたとのことである、この誘惑の物語は菩提樹下に在りて沈思瞑想せる時の心に浮び來れる凡てのことを擬人したものであらうが、同じ擬人的の試誘譚でも耶蘇のは余程趣を異にしてをる、全體釋迦と耶蘇とを試誘の方面から觀察すれば釋

迦のは余りに普通の人間とは懸離れてをる、而して釋迦のは殆んどこの試誘譚の外、即ちその以後の彼が生涯の上には何も試誘が現はれてゐないやうである、然るに耶蘇のは人間的である普通の人生の生活の上に現はれ來り得べきもので、而してその試誘は彼が一生涯を通じてゐる、受洗した後、荒野に試みられた、この談は今次に誌してみたといふ思ふが、これ以後其最後に至るまで、時々現はれた、而して其試誘の中に生活したまふ間の耶蘇は誠に人間らしく、人の生涯と隔る處が少ない爲めに同情の心が相互に起り易いと云ふことも出來やうかと思はれる。

聖書中にある耶蘇の試誘譚は次のやうである、

偖イエス聖靈に感されてヨルダンより歸り靈に導かれ野に適て、四十日惡魔に試らる此諸日なにをも食ず四十日畢てのち餓

たり、惡魔かれに曰けるは爾もし神の子ならば此石に命じてパンと爲せよ、イエス答けるは人はパンのみにて生る者に非ず唯神の凡の言に由と錄されたり、惡魔また彼を高山に携ゆき一瞬間に天下の萬國を示して、曰けるは此すべての權威と榮華を爾に予ん我これを委任たれば我が欲む者に之を予ふべし、故に若しわが前に拜跪ば悉く爾の屬とならん、イエス答けるはサタンよ我後に退け獨主たる爾の神に拜跪これにのみ事べしと錄されたり。惡魔またイエスをエルサレムに携ゆき聖殿の頂に立て曰けるは爾もし神の子ならば此より己が身を投よ、そは神その使者等に命じて爾を護せん、爾が足の石に觸ざるやう彼等手にて扶べしと錄さる、イエス答けるは主たる爾の神を試む可からずと云おけり、惡魔この試誘みな畢て暫く彼を離れたり。」

これが外形の上に顯はされた試誘でないことは明らかである、このことに關しては別項中に耶蘇の試誘と題じて論じたのを參考されんことを望む、耶蘇の生涯として知れてをるのは僅かに二年位の間である、「狐は穴あり、空の鳥は巣あり、されど人の子は枕する所なし」と書いてあるが、實に彼の境遇をよく簡明に顯はした句である、其最後の光景に至つては到底筆紙の及ぶ所でない、其凄慘、其悲愁、誰か斯る間に堪え得る者があるであらうか、神を父として其愛に信頼するものならずして、若し其試誘の一にだに遭遇したならば悶絶するであらう。四面皆楚歌なりと云ふが、四面所でない、味方も事實上の裏切者である、心を解してくれない友は敵よりも尚ほ淺間しく感ずるであらう、弟子の中からは彼を敵の手に賣するものが現はれた、他の弟子も彼が心と使命とを解することは出來な

い、敵は吼え哮り、蒜々と肉薄し來る、十字架上の彼、眼を閉ぢて其光景を想像に書きみよ、十二時ごろより三時に至るまで遍く地のうへ暗黑と爲れり、日光くらみ、殿の内の幔眞中より裂たり」と云ひ、「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」即ち「わが神、わが神、何ぞわれを棄てたまふや」と叫べるをきえるものありと云ひ、又「イエス大聲に呼り曰けるは父よ我靈を爾の手に託く、如此いひて氣絶ゆ」と誌してある、偉人となるも亦難きかなと叫ばねばならぬやうに感ずる、試誘の壓力は實に猛烈ではないか。

此等人生の試誘は如何にしても除くことは六ケ敷のである、早晩吾人の上に現はれ來るのである、否既に其試誘の中に居るものもあらう、又一度其敵勢を打拂ひて少休息をなしてをるものもあらう、されど魔軍は今や其隊伍を整へ、再び襲來せんとしてをるので

ある、之に對して如何になすべきか、其心得の一二を論じてみやう。

退くは敗ぶるゝことである、伏從するは征伏さるゝことである、倒るゝは破滅であると覺悟して、恰かも敵に對するときの如く、全身全力、全心を擧げて吾人は少しも屈せず撓まず、試誘に向ふことが肝要である、避けやうとて避けられるものでない程に人生と切つても切られぬ試誘が如何に怖ろしとて、これは眞向に對すべき敵ならば、後を見するが最後、敵の手中に陷るべきを知らねばならぬ、假令打死するとも勇士の健げなる最後の働をなしたいものである、われが弱くなれば敵は强くなり、われ强よければ敵は弱くなるのである、「天の理、人の和、地の利」は勝利を得んとするものゝ最も注意すべきことである、位置の善き機會は一つもはづさず之を捕へ、最も鋭利なる武器を執るやうに務め、生命を賭して居ることを考

ふべきである、敗亡するは死することである、殊に試誘の場合には從ふことは疑惑の奴隷となり、自己を信頼する情を失ふことの深みに沈み行くべき運命の巖頭に立つてをることをよく知つて居ることが肝要である。

單に試誘と申せば怖ろしくもきこえ、敵とのみ考ふるの傾向があるゝ、それでこゝには一の敵として奮鬪すべきことを云つた、しかし、もう一層深い處に進み行いて試誘の何物なるかを考ふれば、肉體の上に現はれ來る萬般の苦痛、精神界のも凡ゆる失心苦悶等は恰かもよき友人でゞもあるかの如く思はれるであらう、これ等の經驗は一として何等の教訓と救助と恩惠とを與えざるものはなからう、彼は來りて人生破滅の大覺醒を促し來る、苦き言葉でわが痛手をえぐらるゝ時は嫌な思もしよう、しかし彼は眞正の友人が其

人の將に墮落せんとする時は如何に怨むも怒るゝ、よし憤りて手を振上ぐるやうなことになつても、極言するが如くに現はれ來るのである、されば吾人は試誘や、苦痛や、煩悶や、凡ゆる人生の暗黑なる境地にすゝむ時は、假令一見して抵抗的に見てても深く〳〵其意味を味ひ、其心の奥底にある友の情を知らんとする如くにせねばならぬ、只友の情を持ち、友の眼によつてのみ見出さるべき心の秘密を解するやうに、その心とその情とを以て苦悶の秘密を闡明すべき苦である、其使命は友人の愛にこもれる手紙を受けた積りで受けてみよ。眞情をこめた友の言葉はわが靈を刺すことありとも、これに怒つたり、短氣であつたりするのは惡いのである、これは未だ友を信せざるからである、友を信ずるならば決して其言の奥底に横はる意義を見出さないと云ふことはないのである。いや友

人に對するよりも尙ほ一層進んで神に對する如くせねばならぬ、神を愛する如くせねばならぬ、若し神を信じてをるのならば、神は愛なる神である、愛なる神は如何で其子を惡みたまふことがあるものか、鞭は愛の炎である、鞭を上ぐる程に深き愛に炎えてをる、神の人に對したまふ働はいつ迄もよく人に感せらるゝのであるか、神が己の如くに人をなさしめたまふとは如何なる意味であるか、神の性質に似るとは如何なことを申すのであるか、吾人が靈性の益々光明を發揮され、精神的生活の上に向上し、活潑々となることである、この性質は安易を通して得らるゝとと云ふよりも、苦難を通して得ることが却つて近道ではあるまいか。ポーロが云つた句に、「患難にも欣喜をなせり、蓋は患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるを知る」云々、啻に希望

どころでない、患難は人生そのものを建設するものである、神の完全が如く完全き方に導びき行くものである、然らば患難現はれ來らば人は愈々敬虔にして眞面目とならねばならぬ、茲に人は一層適切に神と共に在ることを感ずべきである、患難を以て「天道是か非か」を叫ぶものと、苦るしき時の神だのみをなすものとは共に不信仰を表明するの好一對である」。罪惡の重荷は自ら其罪を犯した人が負ふ許りでない、清淨潔白な生涯を送る人も尙ほ其苦痛と悲哀とを嘗めるのである、他人と共に悲しみ、他人のために苦しむのは社會の常態、時にはわれ、誰のために苦しむのか、親族のためにか、朋友のためにか、はた見る知らぬ人のためにかを知らずして、其重荷の壓迫を感ずることがある、同情心の厚き、愛心の博きものは自ら進んで其境に在ることを喜ふものである、否吾人が人生の目前

に苦難憂愁をひかへて居るならば吾人は如何にして其苦難に出會ふべきか、豫め準備を要する、それが爲めにも吾人は自ら進んで他の人の苦悶を味ふことが必要ではあるまいか、而してこの人の苦しみ悶え居る所に一掬、同情の涙を灑ぐことが出來るならば世はいよ〳〵其進化本來の目的に一歩を近づくることである、又同時に斯る勇猛な義俠心と温き同情心とに自己本來の人生を暉やかすことゝなるので、こゝに偉大なる人格が養成される、偉人は自己の犯せる罪業に苦しむ所より生ずるものが多いと云ふよりも、人の罪業の苦悶に惱むより生ずるものが多いと云はねばならぬ。

耶蘇に就いて見よ、彼は嘗つて自ら罪惡を犯したことがない、若しありとするも其生涯の事件として世に現はれてをるものに何等その影響を蒙つてをるものがない、而して其生涯は實に悲慘を極

めてをる、「空の鳥は巣あり、狐は穴あり、されど人の子は枕する所なし」とは彼が日常の生活であり、「世の罪を負ふ神の羔をみよ」と人が叫んだ程、罪惡のために悲しみ、苦しみ、果ては罪なきに世の人の罪を負ふて十字架上に慘憺たる最後を遂げられたのである、ゲッセマネの園に入りて血の涙を流して神に祈り、「この苦き杯をわれより取去りたまへよ」と哀願し、十字架上に在りては「わが神、わが神なんぞ、われをすてたまふや」と絶叫したまふた、其境の憐れなること、慘烈なることは只之を思ひやるだに戰慄する程である。

「キリストの愛より我儕を絶らせん者は誰ぞや、患難なるか、或は困苦か、迫害か、飢餓か、裸程か、危險か、刃劍なるか、是われら終日なんぢの爲に死に付され、屠られんとする羊の如くせらるゝ也と錄されたるが如し、然ども我儕を愛めるる者に賴すべて此等の事に勝得て

餘あり、そは或は死、或は生、或は天使、或は執政、或は有能、あるひは今あるもの、或は後あらん者、或は高き、或は深き、また他の受造者は我儕を我主イエス、キリストに賴る神の愛より絶らすること能はざる者なるを我は信せり」とはキリスト教の大傳道者ポーロの信仰を表明した文句である、彼は深くキリストによりて神の愛を味つたのである、神の愛に比ぶれば餘のものは數ふるに足りないものである、イエスはまた彼よりも尙ほ神の愛を深く〳〵心に實驗せられたのである、神の愛は畢竟父の愛の完全なものである、これが基督教徒が世に處して生死の際に會しても泰然自若として動かされざる大安心の基礎である、天父の慈愛を知らざるうちは少しの苦痛も重く感せられる、いや苦痛悲哀は人間を呪ふために在るのかと感せられる、所が神を知り、神の愛に賴るときは小兒が母の

懷に在るとき如何なる恐怖しきことが起つても平穩と眠ることが出來るやうに、全く安心して其苦痛と悲哀とに耐え忍のばれるのである、それ許りでない、困難そのものが愛の聖手の業と思はれ、悲哀は父の慈悲の表明と悟りながら、喜び勇みて、その苦痛患難を受くるのである、纖弱な體質のものが病に罹るならば、其苦痛を感ずることが甚だしい、靈性の纖弱なものが、世の苦難に堪へ忍ぶことが出來ないで自殺を謀り、華厳の瀧に飛び込んだり、恨み厭ふて世を脱れ去つたりするのである、精神の安んずる所が、全知全能にして攝理深き神に在るものは却つて悲哀と困苦とが向上の機會となる、鋼鐵は烈火に燒かれ、銀錬されて、益々有用の度を增すのである、神の愛が深ければ深い程試錬の强さも嚴しいのである、古來の大人物には皆それに相當した準備、苦難があつた、精神の高壯な

るためにも亦その準備、苦難がなければならぬ、神の御旨はいと深き哉。

「哀むものは福なり」とはキリストの說きたまふた所である、悲哀なくして、如何で歡樂を知ることが出來やうか、苦痛なくして、如何で快樂の樂しきことを味ふことが出來やうか、大なる悲哀は大なる幸福のあることを證し、大なる苦難は大なる歡樂のあることを明らかにする、最も微細な罪惡にも、よく大なる煩悶を感じ得るものは天國の樂しみ、神の恩惠をよく、深く味ふことの出來るものである、吾人が苦痛を受くることは實に感謝に堪へざることではないか。

(六) イエスの試誘

試誘の記事は約翰傳に全く其形跡を止めずして共觀福音書のみに在り、共觀福音書として馬可には僅かに二行四十八字を以て誌されたるのみで、馬太及路加は詳細に渡りて之を載せてをる。記事の最も早き馬可傳によりて試誘記事の骨組を區別すれば四となすことを得るのである、洗禮の時顯はれたる聖靈たゞちに彼を勸めて野に行かしむ(一)彼は四十日其處に在りてサタンに試みらる(二)彼は獸と共にをれり(三)天使彼に事へぬ(四)是である、イエスは洗禮の時に於て聖靈により神愛の保證を得た、野に於ては惡靈と鬪ひ之に勝つた、この後者に關し共觀福音記者は說明せんと試みたるのである。

馬太、路加の兩記事を詳細に檢査すれば相互に一致すること能はざる點の多きことを悟ることが出來る、先づ第一に路加は馬可に倣いて試誘の事實を誌さんと心懸けたるに馬太はイエスが其道德上の力を試みらるゝために野に導びかれたるは神の目的の一部となせるのである「惡魔に試みられん爲に野に往けり」と記者は其試誘の目的を說明した、馬可がサタンなる言葉を用ひし所に惡魔なる語を使用せしは馬太、路加共に一致せし所、Satan は希伯來語の普通名詞にして「敵」を意味してをる後定冠詞を其字の前に添へて固有名詞となし惡靈の頭を表はすに用ひらる、又聖經の中にサタンは罪の告訴者、誣告者として表はさる、この意味に於て「誹毀者」といふ意味を有する希獵語の ho diabojos (惡魔)と呼ばれたり。默示錄十二章九、十には「大なる龍」「老蛇」として說明されてあるサタン

に關する希伯來人の思想の不明瞭なることは舊約書歴王記略上二十一〇一、サムエル後書二十四〇一等によりて察することが出來る。

第二は試誘の時である、馬可は四十日間試みらるると誌して斷食せしことを誌さない、然るに馬太、路加共にこの四十日四十夜の斷食を誌すことは一致するが、試みられし時期に關しては兩者相一致せざるのみならず、兩者とも馬可とも一致せず、馬太は四十日斷食の終即ちイエスが飢えし時に試むるもの來れりとしてをるが馬可、馬太の記事の矛盾あるを認めたる路加は之を接合して四十日終りて餓え、其飢えたる時に惡魔試みることを再び初めたりとしてをる、四十日試みてイエスの力を知れる惡魔が再び試を繰返へす如き恐をなさゞるべきに斯くなしたりとせしは路加の補綴拙は

拙なりと雖も尙ほ其苦心の跡歴々として指すべきものあるに非ずや、路加の記事は馬太、馬可の後にあらはれたので而かも彼が兩記事を參考せしことも察することができる、第三は場處の順である試誘の序である、馬太路加共に「此石をパンとせよ」の試誘を第一とせしは一致してをる「己が身を下へ投よ」の場處は猶太的なる馬太は猶太人に對して云ふが如くに只「聖き京」としてエルザレムと故意らしく云はす、然れども路加は異邦基督敎にして萬民的なればエルザレムと云ひし區別はあれど、この事件を共に猶太人の首都となせしことは同一である、しかもこの聖京にて試みられし順序は馬太は第二となせるに反して路加は第三となせり、こゝにも路加が補綴の苦心を察せねばならぬ、「爾の神を試むべからず」とイエスの答へし語はこれ明らかに斷乎として試誘を排斥せしの語

に非ずや、既に試誘を排斥する決心の堅きを見し惡魔いかでか再び彼を試みるの愚を敢てせんやとは路加の意である、加ふるにイエスのありし所は最初曠野にして次に都城に行き更に再び高山の頂にありとするは余りに場處の順序上可なるを見ず、曠野より高山、高山より殿頂とするの自然なるあれば斯く改竄せしものであらう、而かも其試誘の內容より論ずれば馬太傳の方可なるものあるが如し。

斯く記し來れは試誘譚の歷史的價値に疑を狹むもの出て來るあるも決して拒むべきの理由がないのである否之は疑を狹む者誤れり、試誘の事實は只地理上の相違、順序の矛盾、時の前後等により て否定さるべきに非ず、そは傳說の傳はる間に差異を生せしに過ぎずと辨護するものあらんか吾人は尙ほすゝんで記事の歷史的

價値なき理由を列記しやう。

惡魔信仰の由來を考へんに、古代希伯來人の間には靈に高等劣等の區別をなし又神聖と不潔との別を立てた、漸く唯一神敎的の境地にすゝみ至りて斯る古代の自然鬼神論的諸靈は獨一神の從屬と見做されたのである、然れども猶太人がバビロン謫寓後ペルシヤの配下に屬するに至つて天使政治の思想發達し、天使中善惡の區別を設けた、尙ほもすゝんで神に對して敵害の地に立つことなかりし惡天使、サタン等の思想は「智恵の書」に至り、單に罪の告發者たるのみならず、嫉妬心より聖徒を陷擠して喜ぶ者となつた、死は彼によりて人類に來つた、イエスの當時に至りては枝葉に枝葉を生じ、此世の主又は神は惡魔なりとさへ信ずるに及んだ。

野蠻幼稚なる宗敎には斯る信仰一般に擴がり猶太敎も基督敎も

同じく幼稚なる人民の思想を傳承し加ふるに一種誤まれる世界觀これを助けて惡魔信仰を盛ならしむ、然かしこれ野蠻無智なる俗信にじて今日に於ては誰も斯るものゝ存在を認むるものなきに至つたのである。

存在することなき惡魔、人文未開の遺形たるサタン、如何でかイエスを試みることあらんや。

惡魔の存在は兎まれ、記事の上に顯はれたる試誘及び惡魔の出現甚だ拙なるものもある、惡魔現はると云ふ、人の眼に認めらるべきものなるべし、曠野に在る耶蘇の眼前に或る異形の相を具へたる惡魔現はれ來りて彼を試む惡魔の失敗する當然である、而かも之を敢てするに至つては其術の拙劣なる狡智に長けたる惡魔の所業と考ふること能はざるに非ずや、惡魔の所業は此に止まらず、耶

蘇を携へて高山に又は神殿の頂に至りしと云ふ、其なす所余りに魔術的である、ラーネッド氏解釋の馬太傳はよく日本人の間に用ひらるゝが、之の中に「イエスが惡魔に携へられてエルザレムに行たまふたと云ふのも實際の事實とは思はれない、されば少くとも此物語の幾分はたしかに譬喩である」と書いてある而して丁寧に四十日四十夜の斷食から以下の所を事實として說いてあるのは實に大なる矛盾であるが、兎に角惡魔の所業には正統的解釋をなさんとする人でさへ驚いてをることはこれで證明される、又惡魔が耶蘇を携へ至りしと云ふ高山も到底、地球の上に見出すこと能はざるものである、世界の諸國を眼下に瞰るべき山のあらんとも、そは世界を平板と觀察せし時のことなり、地球が圓形なる以上到底これ一の夢想にすぎず、いやイエスの當時にありてはこれ決し

て夢想ならざりしものである、當時の觀念によれば、世界のあらゆる領土と云ふも甚だ狹く、かのアレキサンデル大王は父王フイリップが印度を遠征するとき、彼長して征伏すべき領土のなきことを恐れしと云ふに非ずや、實に當時の考の世界は狹い。今日の十分一もなき國々を以て全世界となし、この世界は平板の地上に存ずとしたのである、されどこれも亦大陽中心說と共に過去の迷夢と消え去つた。

イエスが四十日四十夜何ものをも食はずして死せざりしと云ふも亦一の疑ふべきことに屬してをる、馬太十一〇十八及び路加七〇三十三等を引用して「此諸日なにをも食はず」と云ふは絕對に飲食せざる意味にあらず、只通常の飲食をなさゞりしと云ふに止まれりと牽强附會せんとするも、彼が導びかれしは曠野にして野獸

と共に居つた、而して斷食せりとある、又四十日畢りて餓たりと添加してある、確かに何をも食せざりしことを證せんと務むる形跡あるに非ずや、これも亦事實として疑ふべき一點たるを免れず。

然り斯く論じ來れば一として歷史上の事實として確むるの基礎なきに非ずや、然らばこれ虛搆架空の荒誕なるか、斯る譚を生み出すべきの或る根底もなきか、これよろしく思考すべきの問題である。

猶太の神の人たるモーゼにせよエリヤにせよ皆神の試を受けたのである神の撰民たるイスラエル人はた神の試を受けた國民の瞻望するメシヤいかでか試を受けざることあらざらん、若し試みに失敗せんか救世主たるの價値なかるべしとは救世主信仰の一部分であつた既にこの素因がある、次に來るべきは如何なる試み

なりしか、材料は舊約書に在り、舊約聖書申命記第八章二節に「汝記念べし汝の神エホバこの四十年の間汝をして曠野の路に歩ましめたまへり是汝を苦しめて汝を試驗み汝のいかなるか汝が誡命を守るや否やを知らんためなりき」と、メシヤはイスラエル國民の歴史を一身に縮寫すべしと考へし彼等この句を思ひ出すと共に第一の試は畫かれたのである、イスラエル人民の試驗に落第せしに反しイエスは斷乎として試誘を排斥した「人はパンのみにて生るものに非ず人はエホバの口より出る言によりて生るものなり」とは同じ申命記の第八章三節の句である、もと天より下れるマナのことを言はんためなりしも新約書には他の意義が加へられり、曠野を彷徨せしイスラエル人民は神の試を受けしのみに非ず却つて神を試みたのである。(キリストを試みて蛇に殺させたるもの

ありとは哥林多書に誌す所なり以て試みるてふ意義を察すべし、出埃及記十七〇一—七、民數記略廿一〇四—七、同廿〇三、四、以賽亞七〇十二等參照)然るにイエスはこの試誘を排斥した(申六〇十六)又イスラエル人民は神を棄てゝ偶像を拜するに至つた、而かもキリストは「主たる爾の神を拜し唯だ之にのみ事ふべし」(申六〇十三)と云ひて唯一神教の凱歌を奏せるのである、

然れども若し吾人にしてこの試誘譚は單にメシヤなるイエスがメシヤ的天職に特別なる性質と方法とに關する彼の決意を示し。又如何なる方法によりて其奇蹟的メシヤの力を用ふべきかに關すとのみ觀察するならば大ひなる誤解に陷ることとなるのである。メシヤ(救主)は晉に生活するためのみに非ず、其名譽に相當する力と光榮とを以て、自が隨意に地上の利便を有することの必要あら

ざるか、若しイエスは斯の如き手段を有せず又魔法的方法により
ても彼等を得ること能はず否、地的生活の必要に應ずるだけの供
給をさへ自ら得ること能はずとせば如何にしてメシヤたるべき
か、これ實に大なる試誘なりしに相違なし、洗禮の後に沈思默考し
て思一度こゝに至る時彼は聖經に訴へて其疑問を解決せんとせ
しことは推するに難くない、斯くて彼は生命の本原たる神の言葉
を見出し、之を以て浮世のパンより卓れりとなしたのである、當に
彼は生活に於てのみ神の力に依らず、總ての危害も必要も皆凡て
を擧げて神の愛に任せたのである。既に神の意に任す何の必要あ
つてか神を試むることをせん、神を試むるはこれ即ち己が意を遂
げんと試みるの野心を藏するのである。而して彼がメシヤたる任
務は當時の傳說的なる地上の權勢と名譽とを要するの王にあら

す、地上の權力を得んと務むることは即ち神の眞意に逆ふことゝ
解したのである。父なる神の心は彼をして他を仕配するに非ず、「反
て人に役はれる」に在るの確信に達せしめた、この心の經驗は恐ら
くイエスの弟子に向つて語れる所なりしやも知れない、これと彼
と相合してこゝにイエスの試誘譚は形成せられたのである。
彼が確信は成れり、如何にこの確信を實現せしやは此後の問題な
んである。

有逆於心、勿尤人、尤人損德。有所欲爲、勿正心、正心
破事、君子之道在修身、

小楠

(七) 害悪の眞趣

吾人の心胸を痛め、思を惱むること最も甚だしきとは人間社會に種々なる罪惡の暴露し來りて、其結果慘憺たる狀態を呈し來ることである、試みに見よ、暴飲、喫亞片、荒淫、賭博のやうな罪惡が如何な結果を生ずるであらうか、心身の健康を破り、平安を害し、家庭の混亂、教育を亂らざるはないと云はねばならぬ、怠慢、放逸、虚欺、蠱惑、不信、自負、誇驕、傲慢、豪奢、貪名などは困苦の原因となり、懶惰、不潔、怠慢、汚穢、荒癈、淫逸、暴酒、不攝生などは疾病、疫癘流行の媒介をなすのである、惡慝、貪婪、暴很、妬忌、詭譎、刻薄、讒害、毀謗、狎侮、放肆、矜夸、譏詐、忿恚、執拗、躁急、僻邪、悖戾、頑硬、背約、不情、不慈、娼嫉、爭鬪、分爭、兇殺などは社會に不和を釀したり、人類の幸福を壞つたり、人々の快樂を奪ふ

たりすること幾許なるか知るべからざる程である殘忍、憎惡、猜忌、忿怒、擠排などは相互の間に相賊してをる又自己のことのみを考へて奸惡なる手段を弄し、家族も壞れて各自其欲する所を以て相博ち相爭ひ、夫婦も相害ひ、人は其父に背き女は其母に背き、媳は其姑に背き、人の敵は其家の中に在るの現象を生ずる。裁判所や監獄はいよ〳〵繁昌すると云ふことは明らかに犯罪、殺害、詐欺、暴横、奪掠、收賄、賭博、盜賊等の熾に社會の安寧と秩序、幸福と進歩を害しつゝあることの證據である、斯る不義、惡德が人間に伴なふてをることは誠に悲しむべきことである、而して斯る不義惡德が如何して人間の裡に現出するやうになつたであらうか、この害惡は何を意味するのであらうか、斯る罪惡の存在することは全體宇宙に正善なる神ありとする思想と相容るゝであらうかと、疑問は疑問を生

み、終に人生、不可解の歎をなさねばならぬではなからうか。

人類の幼稚なるに當りてや、自然には善惡の諸神存在して、善神は善事を司配し、惡神は惡事を統轄するものと信じてゐつた、この觀念は其根底の思想となつて多くの宗敎が發達したのである、現にアッシリヤの宗敎では善惡の二神を說いてをる、「アヒユラマズダ」と云ふのは賢き造物主で善靈である、この善神の國は閃闘以來其敵反の靈なる「アーリマン」の國と對峙して居る、この惡神「アーリマン」は自ら一物をも創造することは出來ないけれども、「アヒユラ」が創造した善なる世界の中に形體上及び道義上の害惡を混入して之を損傷せんとは試みるのである、實にこの善惡兩神の爭闘が世界發展の全歷史を充塞するのである、世界歷史の第一期には「アーリマン」の破壞力が愈々增大する、豫言者ザラッストラの出現す

ることによつて始めてこの趣が一變することを得、茲處に漸く善に進むの傾向が現はれてくるのである、ザラッストラによつて啓示せられた「アヒユラ」善神の善言こそは其敵に勝つことの出來る必勝の武器である、而してこの勝利が完ふなると同時に世界の歷史は其終局を告ぐるのであるが、其最後に至るまでの人間の義務は、身は善惡二個の勢力に狹まり、其爭闘に關與し、善神に加擔して自己の身體と靈魂とを淸淨になし、力の及ぶ限り地上の生物を蕃殖せしめ、殊に勞働によりて土地の耕作をなすべき筈である、若し人が不潔、懶惰、欺罔に陷るやうなことがあれば、これは惡神「アーリマン」の伴となるのである、斯る人は義罰を蒙り、其惡計は必ず亡ぼさるゝのである、之に反して善神に隷屬するならば、其善行の報を得るのである、と云ふ、この宗敎思想では人生に現出し來る害惡、罪

業は全く惡神の仕事であると考へてをるのである。

希臘人の宗教思想は仲々趣味深きものがある。「ヘシヨッド」が人類起原の昔譚を書いてをるのによると、昔時クロノスの御世に黃金時代があつた、この當時に當りては人類は皆幸福圓滿の中に生活した、其處には勞苦もなければ困厄もない、年の老ふることもなければ、悲哀もなく、皆自然の豐富なる賜物によりて歡樂斷ふるひまがなかつた、無論彼等にも死と云ふものがあつた、然し其死は恰かも安らけき眠に就くと同意義であつた、この人種が滅絕した後のことである、諸神たちは白銀時代を造りたまふた、處がこの時代の人種は其力も其質も黃金時代の人種に劣つて、而かも奢侈傲慢なりし上に神に悖戻したのでツオイス大神は彼等を亡ぼして、恰かも黃金時代の人が死せる時に彼等を化して善靈となしたやふに、

この白銀時代の人々を化して惡靈となしたまふたのである、次に現はれ來つたのが眞鍮時代である、この時代の人は愚かにも其性剛愎にして爭鬪を好みしがために相攻め相殺して全く自滅の悲運を造つたのである、最後は即ち現代であつて鐵の時代と唱えらるゝのである、この人種は勞せずして食ふことは出來ない、齷齪として辛勞力作して生活の道を見出さねばならぬ、而して各自の生存競爭をなさんが爲めに道德、誠實、廉恥、心などが漸々銷え盡して惡をなすに汲々としてをる。と云ふのである。

之とは全然其類を異にしてをる希獵神話がある、それはプロメトイスの事に關する昔譚であります、プロメトイスと申すのは「チタシ」の一にして即ち粗野なる萬有の靈である。

世界創造の時に當り、新しく生れたる地には活氣に充ち生々とし

たる種々なる植物萌え出で凡ふる種類の動物が蠢動するのをみたるエロスは彼等が授けられたる生命を保存し、喜ぶことを得しむるために直覺を賦與することの必要を認め、其働の補助としてイヤペッスの二子プロメトイスとエピメトイスとを呼寄せた、而して萬づの生物に思慮ある賜物の分配をなさせ、後、凡ての生物と植物、及び萬有を仕配する高等動物を造らしめ、之を人と命令したのである。

先づ彼等の行動せる所を申せば、既に創造せられたる生物に直覺を賦與することである、其他の賜物も惜げなく萬物に分配した、所が見れば最早人を造るべき材料は用ひ盡してしまつたのである、如何してこの難關を超ゆべきかと余り深く思慮せずに彼等は泥を取つて人を造らんしたのである、最初に神の像に象りて人の像

を造つた、それからエロスに其鼻の穴から生命の靈を嘘入れしめ、ミネルワ(パラス)をして精神を賦與せしめた、すると人は生物となりて働き出し、其新しき境地に眼を開いたのである。

出來上つた人は其細工の精巧なりしを見てわれながら、プロメトイスは獨り喜がりに狂せん許りに喜んだのである、而して考ふるのにはこの人を不死の神々の完全なるに引上る勢力あらば賦與せんものをと思ひめぐらした結果、火こそ其目的に適すべきものなることを考へた、然し火は特別に神々の特權ある所有なれば到底分配をたのみたりとて拒まるゝは必然のことである、いや待てよ、若し神々が憤怒の余り如何なる罰を課したまふとも竊かに彼處より盗み來るべしと決心したのである。

プロメトイスは暗夜に乘じオリムプスに至りて密かに神々の住

處に入込み、點火されたる燃木をとりて胸の間に隠し、首尾よく其目的の達せられたのを勝ち誇りて神だちのオリムプスを出でた、地上に到着するや否や、これを人間に與えた、そこで人間は之を種々なる目的に活用した、而して身命を賭して彼等のためにせる仁惠ある神に感謝したのである。

オリムプス山の嶺に在る、御座より遠く地上をみればいとも怪しむべき光の暉めくのが見るのである、そこでツオイスの神は何の火なるかを確かめんとしてよく見れば紛ふかたなき天の火なれば其逆鱗のさま、見るものも戦慄する許りである、其罪の罰思ひ知らせんと神誓にちかひたまひし時には神だち喪心せん許りなりしと云ふ程であつた、大神はプロメトイスを鷲掴みにつかみてコーカサス山に運び去りて彼處に鐵鎖でつなぎたまふた、すると飽

くことを知らぬ兀鷹來りて彼が肝臓を嘴き破るその苦しさと云つたら譬へやうがないしかし夜の冷しき時は再び彼の肝臓が生長する、翌日は又兀鷹がきて嘴むと云つたやうに殆んど永久に其苦難の中に囚はれた、後へラクレーズが顯はれて兀鷹を殺し彼が鎖を解いたと云ふことである、人間はプロメトイスの賜物を感謝しつゝ非常な平和と幸福のうちに生活した、空氣は香氣馥郁として恍惚たらしむるものがある、日光は麗はしく輝いてをる、優美なる花、甘き菓實は野に山に充ちてをる、天地萬有は光明と悦樂に富んでをる、何等の苦難なく、悲哀なく、餓餓凍餒なく、疾病なく、死なし、ツオイス神はこれ全くプロメトイスの竊みし火のためなりとして、非常に不快の念を起し、天の火を受けたる罰を蒙らせんと企圖したまふたのである、されば彼はオリムプス山に神だちの會議を召

集したまひ、遂に婦人を創造ることに決議された、神だち、殊に女神たちは各々其有するものを寄與して殆んど完全なるものが出來上つてパンドラと稱したのである。そこで神だちはメルキユリ神に命じてプロメトイスの許にパンドラを携へ行き天よりの賜物を遺らしめたのである、しかしプロメトイスは神だちの遺物に善いものゝあらう筈がないと信じて之を拒んだ、而してエピメトイスにも彼の例に倣ふやうにと勸めてをいたのである、然し不幸にもエピメトイスは斯る企圖のありとは知らず、處女の姿を見て「斯く麗はしく優しき者いかで害惡を擠らさんや」と叫びながら、心底より喜んで彼女を受納れたのである。

蜜月の樂しかりしとよ、歡樂の中に手を執りて涼き森陰に憩ひ或は綠の野に躍り、香氣ある花束をかざし、甘き果實に酔ひ、夢の間と

暮したのである。

快よき夕、綠の芝生にて跳り居つた時のことである、ツオイス神の、使者メルキユリー神が彼等の方に歩み來るのをみた、疲れ果てたる狀態、衣は塵と汗とに汚れてをる、其肩には重たげなる大きな箱が荷はれてある、パンドラは直ちに躍るのを止めて其箱を撿したいのであるからエピメトイスを勸めてメルキユリーを呼ばしめた。メルキユリーはエピメトイスの勸むるまゝに其箱を彼等に托して、直ちに歸來すべきよしを告げながら、何處ともなく立去つたのである、パンドラの好奇心は益々煽らるゝ許り、然し夫の眼の前で、預品を自由にすることを憚り、時機の來るを窺ふてゐたのである。エピメイトスは再び外の芝生に行きて躍らんことを勸めたし、かし、この時初めて彼女は夫の願に反いたのである、彼は眉を顰め

ながら、然し暫時せば彼女も出て來るならんと心に期しつゝ外に出でゝ樂しき人だちの仲間に入りて笑ひ興じたのである、單獨となれるパンドラは心愈々亢じて如何にもして其箱の内容を知らんとしたのである、見れば箱は黄金の紐にて幾重にか繞はれ、その結目も仲々に堅くして彼女の好奇心を誘ふこと甚だしきものがある、彼女の手は箱に觸れた、然し結目の堅さよ、されど指先の敏きパンドラは巧みに黄金の紐を解いたのである、しかし心は未だ蓋を開くまでに決しない、その内に何處ともなく微なる聲ありて「われ儕を救ひたまへ、愛するパンドラ」と聽こゆる、はてなと耳をすませば其聲は確かに箱の中からである、而してこの時、芝生の彼方に笑ひ興せし音も止んだ、彼女はエピメトイスの歸り來らぬまにと、心急かれて、蓋を開いたのである、これは大神ツオイスの計畫した

まふた所が圖に當つたのである、大神は人間の快樂と健康とを妨げんとて箱の中に、凡ゆる疾病、悲哀、害惡、罪業を充してをいたのである、箱の蓋が開くが早いか、彼等は恰かも蛾のやうな、怖ろしき蓋色の羽翼を動かして四方に飛揚し、或ものは恰度歸り來れるエピメトイスの上に飛びつき、或ものはパンドラに、或ものは快樂に夢みてをる者どもの上に飛び下りて、全地は歡樂の聲が、苦痛、煩悶の呻吟と變じてしまつた、エピメトイスは嘗て苦惱を感じたことがなかつたので、痛さが一層甚だしく、怒つたこともこれが初めてゞ憤怒と怨恨の情に驅られてパンドラが不注意の行爲をせめた、責罵の眞最中である、突然美妙な聲で、「何卒かわれも自由にさせて下さい」と懇願する聲がきこえた、それは又不運に充ちし箱の中から來るのである、「開きたまへ、御身が傷はいやしてあげやう」と云ふ聲

が又續いてくる。涙に濕り怒に炎える夫婦は奇異の思にて驚の眼を上げて聲のきこゆる方をみた、再び同じ懇望の聲がきこえたので、エピメトイスはパンドラに命じて再び箱を開かしめた、この時顯はれ來れるものは「希望」にて其白き雪の羽をのばして箱より出て來り、先づエピメトイスとパンドラの皮膚に飛びよりて其痛を治し、それより外に飛び去りて、傷に苦しみ、病に呻吟する人々に其苦痛煩悶の中に忍ぶの力を與えたと云ふことである。

他の傳說にはパンドラ自ら天より來りし節、箱を携へ來りて、それより疾病、罪業など出で來れりと云ふのである。

孰れにしてもこれが古代希臘人の罪惡起原說とみて差したる誤謬はないのであらう。

猶太人の思想も神の遣はしたまふたものであると云ふことは同

じである、今聖書の句を引用してみましやう。

「エホバ神地と天を造りたまへる由來は是なり、野の諸の灌木は未だ地にあらず野の諸の草蔬は未生せざりき其はエホバ神雨を地に降せたまはず亦土地を耕す人なかりければなり、霧地より上りて土地の面を遍く潤したり、エホバ神土の塵を以つて人を造り命氣を其鼻に噓入たまへり人即ち生靈となりぬ、エホバ神エデンの東の方に園を設て其造りし人を其處に置たまへり、エホバ神觀に美麗く食ふに善き各種の樹を土地より生せしめ又園の中に生命の樹および善惡を知の樹を生せしめ給へり、河エデンより出て園を潤し彼處より分れて四の源となれり、其第一の名はピソンといふ是は金あるハビラの全地を繞る者なり、其地の金は善し又ブドラクと碧玉彼處にあり、第二の河の名はギホンといふ是はクシの

全地を繞る者なり、第三の河の名はヒデケルといふ是はアウスリヤの東に流るゝものなり第四の河はユフラテなり、エホバ神其人を挈て彼をエデンの園に置き之を理め之を守らしめ給へり、エホバ神其人に命じて言たまひけるは園の各種の樹の果は汝意のまゝに食ふことを得、然ど善惡を知の樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり、エホバ神言たまひけるは人獨なるは善らず我彼に適ふ助者を彼のために造らんとエホバ神土を以て野の諸の獸と天空の諸の鳥を造りたまひてアダムの之を何と名るかを見んとて之を彼の所に率ゐいたりたまへりアダムか生物に名けたる所は皆其名となりぬ、アダム諸の家畜と天空の鳥と野の諸の獸に名を與へたり然どアダムには之に適ふ助者みえざりき、是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ睡りし時

其肋骨の一を取り肉をもて其處を塡塞たまへり、エホバ神アダムより取たる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に攜きたりたまへりアダム言けるは此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ此は男より取たる者なれば之を女と名くべしと、是故に人は其父母を離れて其妻に好合ひ二人一體となるべしアダムと其妻は二人俱に裸體にして愧ざりき。

エホバ神の造りたまひし野の生物の中に蛇最も狡猾し蛇婦に言ひけるは神眞に汝等園の諸の樹の果は食ふべからずと言たまひしや、婦蛇に言けるは我等園の樹の果を食ふことを得然ど園の中央に在樹の果實をば神汝等之を食べからず又之に捫るべからず恐は汝等死んと言給へり、蛇婦に言けるは汝等必らず死る事あらじ、神汝等が之を食ふ日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善

惡を知に至るを知りたまふなりと、婦樹を見ば食に善く目に美麗しく且智慧からんが爲に慕はしき樹なるによりて遂に其果實を取て食ひ亦之を己と偕なる夫に與へければ彼食へり、是において彼等の目俱に開て彼等其裸體なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり、彼等園の中に日の清涼き時分歩みたまふエホバ神の聲を聞しかばアダムと其妻即ちエホバ神の面を避て園の樹の間に身を匿せり、エホバ神アダムを召て之に言たまひけるは汝は何處にをるや、彼いひけるは我園の中に汝の聲を聞き裸體なるにより懼れて身を匿せりと、エホバ言たまひけるは誰が汝の裸なるを汝に告しや汝は我が汝に食ふなかれと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言けるは汝が與て我と偕ならしめたまひし婦彼其樹の果實を我にあたへたれば我食へりと、エホバ神婦に言たま

ひけるは汝がなしたる此事は何ぞや婦言けるは蛇我を誘惑して我食へりと、エホバ神蛇に言たまひけるは汝是を爲たるに因て汝は諸の家畜と野の諸の獸よりも勝りて詛はる汝は腹行て一生の間塵を食ふべし、又我汝と婦の間および汝の苗裔の間に怨恨を置ん彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん又婦に言たまひけるは我大に汝の懷妊の劬勞を增すべし汝は苦みて子を產ん又汝は夫をしたひ彼は汝を治めん、又アダムに言たまひけるは汝その妻の言を聽て我が汝に命じて食ふべからずと言たる樹の果を食ひしに緣て土は汝のために詛はる汝は一生のあひだ勞苦て其より食を得ん、土は荊棘と薊とを汝の爲に生ずべし又汝は野の草蔬を食ふべし汝は面に汗して食物を食ひ終に土に歸らん、其は其中より汝は取れたればなり汝は塵なれば塵に皈るべきなりと、アダム其

妻の名をエバと名けたり其は彼は群て生の母なればなり、エホバ神アダムと其妻のために皮衣を作りて彼等に衣せたまへり、エホバ神曰たまひけるは視よ夫人我等の一の如くなりて善惡を知る然ば恐くは彼其手を舒べ生命の樹の果實をも取りて食ひ無限生んと、エホバ神彼をエデンの園よりいだし其取て造られたるところの土を耕さしめたまへり、斯神其人を逐出しエデンの園の東にケルビムと自から旋轉る焔の劔を置て生命の樹の途を保守りたまふ。」

全體惡の本源に關する議論を區別すれば三つある、第一は神以外の實在者、即ち無形の心靈的なる存在者、背神者か又は善神と對抗する惡神の仕事にして、神と對峙して其力を制肘せんとするものあるが故であるとしてをる、これが即て惡魔信仰の起因をなして

をるものである、これが前に誌したアッシリヤの宗教にて說かんとしてをる所である、又これは運命のやうな盲目な非人性的の勢力の然らしむる所である、これが神の力を制限することから惡が生じてくるとやうに說くものもある、又純然たる非靈的のもので、これは即ち物質のやうなものであるとするものもあるが畢竟するに第一のものは神と相對するものを惡の根元とするものである。

第二は惡の根本は神が宇宙萬有を造りたまふた時に智惠の不足したのが原因となつてをるとするものである、又一層進步したこの同じ傾向の思想は即ち最近の厭世哲學などである、其說く所は世界の惡は無意識なる神(神と唱ふることを彼等は好まない、單に無意識者と云つてをる)の理に逆く意志の動作よりして生じ來る

結果とするのである、又惡の本源を神自身の惡意に基くものなりとするは重に古き傳說的宗教の說く所である、希獵の神話をみた人、創世記の記事を讀んだ人たちは神の猜忌心や嫉妬心が如何程に深く而してこれが主なる心で人類の圓滿なる幸福を好ます、其文明の域に進涉せんとするを見、これ即ち神の特權を犯すものと認めて、之を厭忌し、之に酬ふるに惡を以てしたと云ふのである。第三は惡の本源を被造者の本性に固着する天然の不完全にありとするもの、又は被造者の自由なる道義的犯罪にありとするものがある創世記の記事は確かにこの方面の意を現はしてをる、人類の始祖が神の禁制したまふたる果實を食ふたと云ふやうな被造物の自由なる道義的撰擇によりて惡がきたと云ふのである、しかし之にはもう一つ忘れてならぬものがある、それは蛇である、蛇と云

ふが其實惡魔が蛇の態をとりて始祖を誘ふたのである、即ちこの惡魔は天使の墮落したものだと云ふ傳說からみると、これをも被造物の不完全なるうちに入れてみる方が正當かと考へられる。

吾人は今此等の說を比較考察して其是非を定めんとする考を持つてゐない、しかし吾人の思想を明らかならしむるために假りに創世記の記事をとつて論步をすゝめてみよう、アダム、エバが禁果を食せし犯罪は最も幸福圓滿なる境地より墮落したものである、この一人の罪によりて罪は人類固有のものとなつた、人は全く墮落した、この罪惡の深淵に沈み居る人を救ふことは只神の人なる罪なきキリストによる外はないのであるとはキリスト敎界に普及し來れる敎說である、しかしアダムの墮落說には非常に難問が附帶し來つて到底これを眞理とすることが出來ないと叫ばしむる

ものがある、この記事全體が單に一の古き傳說で、事實でないとの根本問題をとり除いたとしても墮落以前のアダムを完全なるものとなすことが果して正しい考であらうか、完全なる善意を有するものには惡に誘はるゝ動機のあらう苦がない、若し誘惑に應ずだけの肉慾、驕慢、不信仰、其他種々なる惡しき感情があつたとすれば既に內心の惡は墮落前に存在してをつたと認めねばならぬ、然らば墮落は惡の起原でなくて、茲に始めて惡の外部に現はれたに過ぎないのである。

よしこの議論は如何やうにか解說が付くとしても難問は屬々後から後へと起つてくる、始祖の墮落は其結果を人類の肉體に及ぼし併せて人類以外の被造物にも及ぼし、種々の惡に陷り、死の運命も亦其結果として現はれたと云ふ敎會の敎說は一方其神の思想

と調和することが出來やうか、未熟にして不經驗なる人類の始祖が只一度の試誘によりて永刼の惡中に墮落すると云ふことが、實際吾人の生活に昧はゝる經驗とは全く反するばかりでなく、若し之が事實なりとせば全知にして全能なる神、豫め其結果を知得したまふ神が只一度其試誘に失敗したからと申して之を永久の惡運中に投じたまふとやうの考は全然苛虐殘忍なる暴君にはあり得べきことならんも、善きものも惡しきものにも日を照らし雨を降らする慈愛に富みたまふキリストの神には適せないではなからうか。

アダム、エバが禁制の果實を喰ふて始めて善惡の知識を得たと云ふが、これは其以前に於ては有せざる所のもので、善も惡もなく、單に自然のまゝに生活すること、恰かも植物、動物と異なる所はない

と云ふの意と解しても差支はなからう、之れを今日の神學は曲解して、彼等は神聖なものであつたとする、斯る神聖は少しも道義的に云つて價値あるものと云ふことには御氣が付かないのは誠に今日までの神學のために惜むべきことである、人間が發達し來れる進化の過程を考へてみるに、一寸無邪氣な小兒が漸々生長して青年となり成人となるやうな所がある、彼等の原始の狀態は實に我の明らかなる意識がない、しかし成長するに從つて我の意識が出來、自由なる撰擇によりて善惡を識別し又之を行爲の上に味つてくる、無論こゝに惡と罪とが外部に顯はれてくる可能的性が存してをる、人類も動物と伍してをる所より一歩をすゝめ、こゝに良心の自覺を得た瞬時、こゝに善惡を識別し之を擇みかれを棄てると云ふやうなことになる、無論こゝに墮落もあり得るが、こゝが又

人の漸々進化を速やかならしむる點である、自然の慾望のみを滿足させてをつた時には未だ惡は世になかつたが、この自然の慾望を判斷する良心の眼が開かれた時、他の抑制、他の意志、律法なとがこの良心によつて感得せらるゝ樣になつた處に惡と罪との存する機會がある、斯の如き意味で創世記の記事を讀めば仲々に趣味津々として盡きざるものがあるのである、この良心も初より明らかなものではない、しかし何時とはなしに人にこの良心が現はれて、漸々なる境に錬られ進められていよ〳〵高く、いよ〳〵明らかに、しかもこの聲はいよ〳〵強く神の聲と思はねばならぬやうに響いてくる。

人が時計のやうに造られ、只機會的に動くなれは無論害惡を感じもすまい、又惡と罪とに陷ることもなからう、しかし同時にこゝに

は一の理想もなければ、一の努力もなく、一の精進もない筈である、一の理想に向上し、努力して、煩悶する所の裏側には必ず、害惡と罪惡とが潜んでゐる、罪惡は即ち良心の擇みある所にはいつも、實際に思想としてか、實際としてか存在するものでなくてはならぬ、しかして尙ほも進んで考ふるなれば、全體絕對的に罪惡、害惡なるものが存するかと申すに、決して斯るものがある筈がない、これは比較的のもので、一の理想の標準に對して或る行爲は惡である、その理想がすゝむに從つて其行爲の上に惡が增加して行くとも云へやう、しかし一としてそれ自身に惡と名づくべきものは見出すことを能はざるものである、惡と云ふものゝ如何なるものかを究めんと務むるものは必ず、人心の進化向上の逕路を辿ることゝなるであらう、即ち惡が人をして益々上に押すゝめてをる、いや人が向上

した其反面に惡があるのである。

艱難が人の弱きを悟らせ、其心の奥底にある神的勢力を悟り、之に信任することを知らするやうに、罪惡も亦人性を知らしめ、自己を悟らしむる槓杆である、困苦及び死と戰ふこれが道德の試錬と云ふことが出來るなれば、罪惡と戰ふことは神を知るの試錬ともいへやう、而してこの神を知り、神の心を悟り、其意志と自己の意志とを一致せしめんとすることが即ち眞の善である、然らば罪惡も亦神に至るの途たり得るではないか、否この味を深く解する所に人生の妙趣がいよ〳〵味はれるのであると云はねばならぬ。

斯く考へ來りて害惡の意義を默想すれば、あり〳〵と心に何物かゝ明らかになつてくるではなからうか、この思想は確かに今日傳へられてをる神學思想とは相納れないであらう、しかし之が吾心

の實驗と正理との要求する解釋であることは、論を待たないのである。

吾人は害惡を見ても神の深き愛の攝理に感謝せなければならぬのである。これに關して論ずべき點多きも亦他の方面より論じてみたいと思ふのである。

神は我神なり、我は神の人なり、
神は我祖なり、我は神の子なり、
神は我が人なり、我は人の人なり。

黛嵐

徽古樁今、發明神聖之大道。
右文尙武、鼓舞天地之正氣。

東湖

(八) 罪惡の價(あたひ)

(罪の價は死也、神の賜は我儕の主イエスキリストに於て賜はる永生なり)(「羅六〇二三」)

人の罪惡に對して神は如何なる態度を執り玉ふのであるか、古來基督教信者は此の點に就いて非常に惱んで居つた、そして彼等は云ふてをる、人の罪惡と神の正義とは到底相容るゝことは出來ない、人の罪惡の赦さるゝ、唯一の道は罪なき一人の聖者が、身を捧げて神の怒を和むるにあると、さらに言を換へて曰へば人の罪惡はキリストの如き罪なき聖者神の化身たる者を十字架に釘くる程の價があるといふのである。茲に或國を支配する國王があると する、國王は非常に嚴格な人であつて、美しい人情なぞといふことは那處にも認められない、寧ろ苛酷な性質であつたのである、若し

命に反く者があれば、其事情の如何などは問ふ所ではない、直ちに法に照して處罰される、そして其國の人民は、無智蒙昧であつて、國王の命令を、充分に遵守する力がないのである。或時國王の命を犯した者があつたが、王は之を見て非常に怒り、直ちに捕へて獄に投じ、死刑に處罰しようとしたのである。

其時に臣下の心ある者は之を憐んで、國王に人民の事情を奏し決して反抗の意あるのではないから、とて、罪の赦免を願ふたのであるが、王は之を聽許しない、却て忿怒し、法を枉げしめんとするは奇怪なりといふので獄に投せられて仕舞ふた、更に宰相が歎願したが同樣である。國王の非常に愛して居た王子も之を見兼ねて赦免を願ふたけれども聽がない、けれども王子は只之に滿足することが出來ないで、遂に人民に代つて身を棄てられたのである、國王

は王子が人民の罪を救はんが爲めに身を殺したといふことを悟つて漸く人民の罪を赦したと云ふ事である。此れは單に一の比喩に過ぎないのであるが、猶太人にも此に類する考が長い間傳へられたのである。猶太の宗教歴史を見ると隨分多くの變遷をして居る。此の間に彼等の思想は段々明になつて來て、其極點に達した時に此の例の如き事が起たのである。此は紀元前五六世紀の頃であつた、舊約聖書中に現はれて居る思想は實に其れである、人の犯せる罪を神に償ふために、神前に或る犧牲を献げたのである、先づ祭司が宮殿に入り最聖所に行つて其人の罪狀を神に告げ小羊や犢を殺したのである、そして小羊や犢の流した血に依りて其の人の罪や汚は洗はれると信じて居たのである。

キリストの當時に至つて、キリストの十字架の死を、かの聖所に於

ける小羊や犢の犧牲と同一に考ふるに至つた。古來の習慣であつた小羊では、未だ充分に人の罪を救くふに足らない、最早人間は墮落の極に達した、實に人は罪の子、罪の塊である、此の人の罪惡に對する神の怒は永遠の怒である、此の永遠の神の怒を和むるものは、小羊や犢ではない、何等の罪なき、神の如き聖者でなければならない、是に至つてキリストの十字架の死は彼等には斯く解されたのである。而して此の猶太の思想を其儘受け繼いで基督教會は建てられたのである。

然るにキリスト自身は、如何考へて居られたであらうか惟ふに彼自身の宗教的意識は猶太の教説と以後の贖罪説と全く關係なき實例を示されたものである。

彼等猶太人の神は、正義の神である、人情なき愛なき神であつた。或

人は吾人を嘲つて、神の差別的の愛を忘却せる者である、神の愛は、決して善惡を包括して凡て一樣に愛するが如き差別なきものではないといふ。

けれどもキリストの神は彼等のいふ神ではなかつた、キリストの味はれた神の愛は實に制限なき愛である、差別なき愛であつたのである私は茲に差別なき愛といふ、けれども決して惡をも喜び愛し玉ふといふのではない。

神は人類の罪惡に沈んで居るのを見、堪へざる悲と憐とを感せられるに違いない、そして神は常に、人類を斯かる境遇に在らしむることを欲し玉はないで、罪惡の自覺に至らしめ、其桎梏より脫出せんことを望んで居玉ふ、之れが爲めに斷えず助力し玉ふのである。

神は決して罪人を憎み玉はない、怒り玉はない絕對の愛の神であ

る、人が罪の裡に入れば入るほど神の愛は層一層に深くなる。

キリストは吾人に之れを說かれたのであつた之を思ふときに、今日の所謂贖罪論の根底は動かされて居るといふことがわかる、また、舊約の正義の神てふ觀念は根本的に破壞し了されたことが知らるゝのである。

彼等は人類を以て、罪の子、罪の塊であるといふ、けれどもキリストは斯くは信じて居られなかつた、如何に罪に汚れて居ても、やがて自覺に達し悔改の心を起すものであると信じて居られたのである、若し此の少き芥子粒程の自覺心や、悔改の心でも之を育て益々修養して行くならば神の如き完全の域に到ることが出來ると思はれたのである。

更にキリストは人と神との間に中保者の必要はないと明に敎え

られたのである、かの放蕩兒の比喩に見ても之を知ることが出來よう、人と神との關係は父子の關係である、若し誤れる子の心に一點父を思ふの念起るときに何の中保者の必要があらうぞ、父の前に「あゝ惡うございました」てふ一言の悔悟は、中保者の千萬言に優つてをる、キリストは此の悔改を吾人に勸められた、これやがて神に至るの道であると敎ゑられたのである。今日基督敎會の敎說は、二千年前の昔キリストが自身で寸斷せられたる、古き生命なき繦縷を其儘襲ふて居るのである。

果して彼等の說く如く神――神の化身――を殺さずんば人の罪は赦されないのであらうか、否、若し吾人の心に一點悔悟の念起るときに、犯せる罪は消滅して仕舞ふのである。素より人の罪の中に在ることは恐るべきものであることを信じてをる、併し悔改は唯一の

救の道である、父子の間に何の中保者が要らう、こは最も純潔なる宗教心である。

アバ父よてふキリストの叫は實に純潔なる宗教心の發露である。

道德はこのアバ父てふ一語の中に包括されて居る、吾人が常に宗教と道德とが一致するといふのは此處である。

種々なる教說に依りて曲解し、根本的に破壞されたる生命なき思想を以て、此の純潔なる宗教心を掩ふが如きことがあるならば、吾人は全力を擧げて之と奮鬪しなければならぬ。

斷而爲之、鬼神避之、苟有疑、不若不爲。

簡堂

天も誠にて天たり、地も誠にて地たり。

和泉

(九) 死の問題を考ふる人に

死は生れたるものゝ何日かは必ず逢着せねばならぬ問題である蕾の儘に萎まねばならぬものもあり、滿開したとて樂しみ最中に散るものもあり、明日は麗はしき花を見ることが出來るならんと望むまにあたら夜半の嵐に名殘を止むるものもあり、苦心慘澹悲痛の生涯を送つて漸く安心の境遇に進んだかと思ふ曉に倒るゝものもある、風雲を叱咤する英雄も、四海を睥睨する豪傑もこの運命を逃るゝことは到底出來ないのである。

死は萬民の必ず味はねばならぬもの、そして死は萬民の最も恐れ、最も悲み、最も嫌ふものである。逃るゝことは出來ずと知りても、如何にかして、これを逃れんと企てゝをるのである。剛健勇敢なる武

人も、博覽多識の學者も、紅顏の美少年も、艶麗の才女も片端から容赦なく、血に渴き肉に飢ゑた死の運命の神は、彼等の生命を奪ひ去るのである。而して益々其無益の計畫を破壞するのである。實に死は千古の疑問である、あらゆる學問、思索の方向はこの疑問に解釋を與へんと試みんとするが、明晰な痒い所に手のとゞくやうな解答はいまだ得られないのである。

秦の始皇の治世に徐福が不死の靈藥を需めんと欲して舟出した談は誰もよく知つてをるところである、蓋し不死の仙藥は古來千萬人の求むる所であつた、輪廻說や、復活說や、靈魂不滅說が各國民の間にあるのは、この不死の切なる願望から生れ出て來たものである。

いくら肉體が永久に死滅することのないやうに努めた所が、それ

は到底無益である、諸行無常は總ての現象を通じて一も洩るゝことの出來ない常則である。さりとて生を求むるの慾望は決して休止するものでない。そこで或人々の間には靈魂が轉々輪廻してゆくものであるといふ說が起つた、彼の印度波羅門の敎の要部を占めてをる考が靈魂の流轉說であることは世人のよく知つてをる所である、日本の通俗佛敎でも偏くこの思想を流布してをります。

「前生は王であつた」とか「あの人は犬の生れがはりであらう」とかいふ談話は愚夫愚婦の佛敎信徒には有勝の談柄である。

北アメリカの土人は、死んだ幼兒の靈魂は、再び女人の腹中に宿つてこの世に再生するものであると考へて居る、黑人（ネグロ）やオーストラリアの土人中にも靈魂が再び生れて白人にすゝむものだなどゝ信じてをるものがある。

昔し埃及では人の死んだあとで、其遺骸を腐敗せしめないやうに、一種秘密の方法で以て棺の中に朱詰とした、現に先頃數千年前の死骸そのまゝの木乃伊が東京博物館に取寄せて飾られたさうですから、誰でも其實物を見ることが出來るが、この木乃伊などは確かに人が復活して、復た以前の體を用ひる時が有ることを考へた結果である。

波斯の宗教にもこの復活の思想が盛であつた、そして其影響は猶太教に及びキリスト教にも入つた、キリスト再來の時に總ての靈が復活するなど申す説は、一時教會の間に流布して、非常の勢力を持つてをつたものである。

死んだ人の靈魂が何處へ行くのかと申すことには、確かな一定の説といふものは無かつた、或はハーデス地下に眠るとも考へ、或は

アブラハムの懐に行くとも思ひ、或はパラダイス(天上)に昇るとも信じてをつたのである。

とにかく永生の思想は一般の人々の信ずる所であると言つても差支はない。

キリスト教徒のあるものは、この永遠の福祉は信仰によりて既に此世に始まるものである、永生とは神及び基督と交はりて完全の域に達したる有様に外ならずと考へてゐる。

ポーロはアジアに於て非常の苦難に遭遇し、生命を保つ望さへ失ふに至つた時、心の中に必死を定め、己を恃ずして死せし者を甦らする神を恃めり」と云つた。

哲人ソクラテスは毒を盛つた盃を手に取上げて、微笑して、死は單に一時の別に過ぎることを説いて泣き伏す友を慰め、予は未來を

探るのだと、喜んで其盃を仰いだ。信仰あるものも、哲學者も、皆來生の存在を疑はない。果して永生はあるのであらうか。

宇宙には二大矛盾が存在してをる、それは即ち死と生とである無限の永生を望むの欲求が萬物を貫いてをることは、確實なる一大事實である。併し又一方には無限の破壞力なる死が總てのものを滅してをる。死のある所には生があり、生のある所には死が隨うてをる、この二者は如何にしても調和することが出來ないであらうか。若しこれが絶對に相容れざるものであり、調和することの出來ぬものであるならば、實に宇宙創造、人生は失敗であると言はねばならぬ、さはあれ科學と哲學とは宇宙の神に支配されて決して失敗でないことを證明せんとしてをるのである、生死は單に一の變化にすぎない、死は恐るゝに足らぬ、生も亦必ずしも喜ぶに足らぬ、

死の瞬間に生が始り、生の瞬時に死が存在するといふ眞理を知ることが出來たならば、こゝに始めて宇宙を尙ほよく達觀するの明を得るのである。

物質論者は死を以て萬事の終焉として、「物質がなければ勢力もなく精神もない、アトムが集合して、始めて高等なる精神的箇体が發生するものであるから、物質は精神の基礎である、人躰の分解(死)と共に人身り精神、人格、我も滅亡するものである」と言つて居る。一寸聽けば尤らしい議論のやうにも聞えるが、併し詳細に研究するときは甚だ粗雜な獨斷論であることが解る、人の生命の發達をしらぶる時は、身躰は或一定時期に全く一變し革新する、併しながら其中に隱在する統一的意識は少しも變ることなく、却つて新物質を其存在の法則に利用し、從はしめて、復た自已を新にして行くの

であるこの統一的の意識即ち我なるものは五官的には認知することの出來ないものである、これが死によりて破壞することなく、昆蟲が殼を脱して一進化をなすやうの新生活に移ると云ふことは、之を否定するの權利と證明とがあるまいと思ふ。

キリストは山上の垂訓に於て「天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし」(馬太傳五章四十八節)と敎へられた。これは人間の運命を最もよく表明した言葉とみることが出來る、吾人々類が有する、神に齊しき性情を圓滿に實成さする時に、始めて父の完全が如くに完全なれりと申すことが出來るであらう、神は靈なりとは基督敎の敎ふる所である、神に似たる性が肉に非ざることは明白である、神の眞理であり、最高の善であり、愛であることは誰も拒まざる性質と稱へてもよからうかとおもふ、この眞理と至善と愛と

は人の理性に具つてをるのである、これを智、情、意の動作によりて實成せしむることが出來たならば、即ち完全の域に達したと言つても敢て認言ではないであらう、眞正の愛は眞誠と認めらるべきものでなければ決して顯はさるゝものでない、之を愛せんと望むものでなければ眞に之を知ることは六ケ敷いものである、神は善と眞理との源である、總ての愛が神に向ふのは即ち人間の運命を完くするといふものである、これがキリスト敎の生活の理想である、否全人類の理想でなければならぬ。

斯る高遠雄大なる理想をかゝげ來りて、さて人の實際的活動をみれば、如何であるか、ポーロが「神の愚は人よりも慧く神の弱きは人よりも强し」と申した言葉は眞に誠である、人の最も智惠あるものと認めらるゝ知識でも既に淺薄狹隘である、愛心深きものと雖も